

「マニフェスト・デステイニー」のバーレスクとしての『パードン・ジョーンズの手紙』

——旧南西部ユーモリストとしてのC・M・ヘイル試論——

廣 瀬 典 生

序

2009年7月、クリストファ・メイソン・ヘイル (Christopher Mason Haile) の「擬似書簡体」(mock epistle) によるスケッチ集『パードン・ジョーンズの手紙』(“*Pardon Jones*” Letters [以下、『ジョーンズの手紙』とする]) が160年余の歳月を経て発掘され、アメリカ旧南西部ユーモア文学・南部文学のキャンノンに加えられた¹⁾。『ジョーンズの手紙』は、ニューオーリンズの『ピ

-
- 1) 以下、C・M・ヘイルの略歴と『パードン・ジョーンズの手紙』の背景については、本書の編纂者である、ハイポイント大学 (High Point University [North Carolina]) 英文科教授エドワード・ピアセンティーノ氏 (Edward Piacentino) による「序文」を参照させていただいた。また歴史的事項・人物などについても、編纂者による「注」を参照させていただいている。廣瀬は、拙著『アメリカ旧南西部ユーモア文学の世界——新しい居場所を求めて——』(英宝社, 2002) の上梓に至る旧南西部ユーモア文学研究の過程で、他のユーモリストによるヘイルへの言及に行き当たり、その重要性を感じていた。しかし、ニューオーリンズ『ピカユーン』(New Orleans *Picayune*) のメキシコ戦争従軍記者——合衆国最初の対外戦争における最初の従軍記者——以外にはほとんど情報がなく、旧南西部ユーモリストとしての位置づけもまったくと言っていいほどなされていなかった。2003年夏、廣瀬は、ランドルフ・メイコン・カレッジ (Randolph-Macon College [Virginia]) 英文・人文学科教授 M・トマス・インジ氏 (M. Thomas Inge) と共にアメリカにおける旧南西部ユーモア文学研究をリードし、旧南西部ユーモア資料の発掘・編纂にも精力的に携わっておられるピアセンティーノ氏に会い、ヘイルの重要性を伝えたところ、発掘・編纂作業を引き受けるとのご快諾をいただいた。6年後の2009年7月、

カユーン』(New Orleans Picayune) の1840年12月2日付から1848年4月27日付のものに断続的に掲載された65編のスケッチと、代表的な旧南西部ユーモリストの一人であったトマス・バングズ・ソープ (Thomas Bangs Thorpe) 編集によるニューオーリンズの『サザン・スポーツマン』(New Orleans Southern Sportsman) の1843年5月29日付のものに掲載された1編、1846年1月28日付のミシシッピ州ナッチェズの『フリー・トレーダー』(Natchez Free Trader) に掲載された1編の、合計67編のスケッチからなっている。掲載の中核となった『ピカユーン』は、ジョージ・ウィルキンズ・ケンドール (George Wilkins Kendall) とフランシス・A・ラムズデン (Francis A. Lumsden) の2人によって、1837年1月25日にニューオーリンズで発刊された (ケンドールの関わりは彼の死の1867年まで)。「ピカユーン」とはスペイン語銀貨 (純銀含有率50パーセント) のことで、『ピカユーン』は貨幣価値どおり6.25セントの値段であり、南部で最初に発刊された、いわば「ペニー新聞」(penny paper) と位置づけられている [Reilly, 54]。Daily と Weekly があり、65編のスケッチのうち、Daily のみの掲載が4編、Weekly のみの掲載が6編で、残りは Daily に掲載された後、Weekly に転載されている。また『ピカユーン』掲載の6編は、かつて旧南西部ユーモアの発掘・発展に大きく関わったウィリアム・トロッター・ポーター (William Trotter Porter) 編集のニューヨークの新聞『時代精神』(New York Spirit of the Times) に転載され、それらを踏まえてソープと、もう一人の代表的旧南西部ユーモリストであるウィ

ルイジアナ州立大学出版局 (Louisiana State University Press) より、「南部文学研究シリーズ」(Southern Literary Studies) の一巻として出版され、ようやくヘイルの全貌が浮かび上がった。好評を得て迎えられていること、また廣瀬の提案からこの出版に至ったことを「序文」の中に明記していただいていることから、アメリカの研究者との新しい交流が生まれたこと、そして何よりも、2005年8月末、ピアセンティーノ氏の作業が続行している最中にヘイルの拠点ニューオーリンズを襲ったハリケーン・カトリーナ (Hurricane Katrina) による大打撃も乗り越えて、埋もれていた文学・文化遺産が160年余の時を経て日の目を見ることになったことは大きな喜びである。ピアセンティーノ氏のご尽力に対して深く感謝申し上げる次第である。

リアム・タッパン・トンプソン (William Tappan Thompson) がそれぞれ、ジョーンズを登場させたスケッチを創作している (廣瀬『アメリカ旧南西部ユーモア文学の世界』[199-201; 262-64] を参照)。いわば、旧南西部ユーモア文学の「間相互テキスト性」(intertextuality [Piacentino, 13])——これを廣瀬は、旧南西部ユーモリスト間のダイアローグを通して自らのよって立つ場(居場所)そしてアメリカのアイデンティティを探る様式、と解釈している (廣瀬『アメリカ旧南西部ユーモア文学の世界』を参照)——を示していたことから、『ジョーンズの手紙』は旧南西部ユーモリストの間ではよく知られていたことになる。しかし今回初めてその全貌が浮かび上がることになった。そこで、全貌をとらえて『ジョーンズの手紙』の旧南西部ユーモア文学における位置づけを試みるのが本論の目的である。

I

C・M・ヘイルは、1814年8月6日、アメリカ北東部ロードアイランド州フォスター (Foster, Rhode Island) に生まれる。1838年暮れ (あるいは39年初春)、士官候補生として在籍したウェストポイント陸軍士官学校 (Military Academy at West Point——在籍期間は Jul. 1, 1836–Oct. 14, 1837 [その後1年間、病気回復〈病名不詳〉のための休暇を取ったが、1838年10月12日に中途退学]) の級友 (Paul Octave Hebert [「ヒーバット家〈あるいはエベール家〉はルイジアナ州初期フランス系移民の子孫「クレオール」〈Creole〉に属する地域の名士であった]) の誘いを受けて、級友の出身地であるルイジアナ州アイバーヴィル郡プラケメイン (Plaquemine, Iberville Parish, Louisiana——級友の父親はこの地でサトウキビ農園 [sugar plantation] を営んでいた) に赴くや否や、級友の従妹 (Marie Clarisse Hebert) との結婚 (Mar. 19, 1839) によって定住を決め、二人の黒人奴隷の所有者ともなって、亡くなる1849年までの10年を、完全に地域に同化した「南部人」として生きた。

まず、1840年に英語とフランス語によるバイリンガル週刊新聞『プランター

ズ・ガゼット』(*Planters' Gazette*)の発行に乗り出している。広告掲載、他の新聞記事の転載、個人的見解(政治的意見)、逸話、またヘイルの事実的あるいは作り話的体験を巡っての『ピカユーン』の編集者とのユーモラスな競演などが紙面を構成していた[Piacentino, 1-4]。この新聞編集と同時並行して、民兵軍(Bayou Goula Guards:ヘイルはしばしば“Village Army”と呼んでいた)の隊長(ヘイルは「副官」[“adjutant” of Village Army]と呼ばれることを好んでいた[Piacentino, 2-3])、郡検屍官、郡保安官代理、治安判事、地元の民主党書記官の順に、多くの公職に献身的に従事し、1845年夏に『プランターズ・ガゼット』を売却した後は、雑貨兼書籍・雑誌・新聞販売の店を営んだりしている。

そしてヘイルは、ジェームズ・K・ポーク(James K. Polk)第11代大統領による宣戦布告(1846年5月13日)によって、アメリカで最初の「対外戦争」(foreign war)として始まった「メキシコ戦争」(Mexican War——あるいは「メキシコ=アメリカ戦争」[Mexican-American War])の戦況を伝える「特派員」(special correspondent [Piacentino, 20])——あるいは「従軍記者」(war correspondent [Piacentino, 24])として『ピカユーン』のケンドールに雇われ、5月半ばにリオグランデ河畔に到着した。それによってヘイルはアメリカ史上、対外戦争における最初の特派員・従軍記者と位置づけられている。パル・アルト(Pal Alto)やレカサ・デ・ラ・パルマ(Recasa de la Palma)における、メキシコ軍とザチャリー・テイラー将軍(General Zachary Taylor)率いるアメリカ軍との国境衝突の状況やアメリカ軍キャンプの様子などの報告を皮切りに、ポイント・イザベル(Point Isabel, Texas)、マタモロス(Matamoros)、カマルゴ(Camargo)、モンテレー(Monterrey)、ハラバ(Jalapa)、ベラクルス(Vera Cruz)などの戦地を駆け巡って記事を送った。しかしそのうち兵士として戦いそのものに加わる。1847年4月には中尉に任命され、ほどなくして第14歩兵中隊の大尉そして指揮官となり、ルイジアナで募った74名の志願兵部隊をベラクルスまで率いて、ウィンフィールド・スコット将軍(General Winfield Scott)の軍隊と合流し、そこでしばらく野営部隊

の指揮官となり、12月にはスコット将軍に伴われてメキシコ・シティ (Mexico City) に赴いている。9月にベラクルスで罹った黄熱病 (yellow fever) が原因で、2年後の1849年9月10日にプラケメイン近くの町 (Indian Village) で亡くなっている [Reilly, 250-51]。

そして、以上のような多角的な活動と並行して、南部人となった時から亡くなるまで断続的にはあるが一貫して関わっていたこと——それが、ユーモリストとして、『ピカユーン』に『ジョーンズの手紙』のスケッチを掲載することであった (以上、ヘイルの略歴などについては、Piacentino [ix-xiii, 1-34]; Reilly [6-29, 250-51] を参照)。

そもそも『ピカユーン』発刊の目的は、テキサス共和国併合、アメリカ先住民 (Native American) のミシシッピ西方への強制移住、メキシコ戦争などを促す領土拡張主義や、それらによって獲得した土地への奴隷制拡大の支持を掲げて、領土拡張は建国当初から神によって約束された「明白な運命」(Manifest Destiny)²⁾ であるとする信念をいっそう確固たるものにするために、それらに関する情報を収集して広く伝達することであった。ヘイルはメキシコ戦争においても、「従軍記者」として『ピカユーン』の目的に適う記事を送り続けたが、同時に『ジョーンズの手紙』を執筆する「ユーモリスト」としても関わっていた、ということになる。

同じく『ピカユーン』と関わっていた代表的なユーモリストとして、マシュー・C・フィールド (Matthew C. Field, 1808-44 [ロンドン生まれで、1812年に一家がアメリカへ移住]) がいる。フィールドは、兄ジョセフ (Joseph) が役者そして副支配人を務めていた劇団の役者を経験した後、まさ

2) 「明白な運命」(Manifest Destiny) という言葉は、『デモクラティック・レビュー』(Democratic Review) の編集者ジョン・L・オサリヴァン (John L. O'Sullivan) が、1845年8月号において、テキサス共和国併合を促すために使った造語——「...年ごとに増え続けていく何百万人も我が国民の自由な発展のために、神によって割り当てられたこの大陸全土に広がっていくという、われわれの明白な運命の成就...」(Quoted in Weinberg, 112.)

に新領土開拓の最前線を回っていた、いわば「旅役者」としての体験や知識を買われて、1839年にケンドールの編集助手に雇われ、ミズーリ州インディペンデンス (Independence, Missouri) を出発する「ミズーリ・ルート」(Missouri route [もう一つ、1841年にテキサス共和国〈Republic of Texas〉のオースチン〈Austin〉近くの砦を出発した「テキサス・ルート」〈Texan route〉もあった]) のサンタフェ・トレイル (Santa Fe Trail) の隊商 (Jul.–Oct.1839) に加わって紀行文を『ピカユーン』に掲載した (Dec. 1839–Oct. 1841)。またスコットランドの探検家ウィリアム・ドラモンド・スチュアート卿 (Sir William Drummond Stewart) 率いるロッキー山地探検旅行 (May–Oct. 1843) に同行し、セントルイス (St. Louis) とララミー砦 (Fort Laramie) の間のオレゴン・トレイル (Oregon Trail) 往復での紀行文37編を『ピカユーン』に掲載している (May–Dec. 1843)。兄のジョセフとチャールズ・キームル (Charles Keemle) の3人によって1844年6月にセントルイスで発刊された『レヴェイユ』(St. Louis Reveille, 1844–50) には7編の紀行文が掲載された。この『レヴェイユ』も『ピカユーン』と同じく、新天地の情報を得たいというアメリカ人の強い欲求・要求を満足させる代表的な情報紙となった (しかしマシュー・フィールドの『レヴェイユ』との関わりは短く、発刊の5ヵ月後 [11月] に死去)。

何よりも二つの紀行文に共通するのは「命名する」(to christen [Santa Fe Trail, 76]) ということへのフィールドのこだわりであった。フィールドによれば、「隊商の間では、一行がインディアンに攻撃されたり強奪されたりしたとき、あるいはそのほかいろいろ深刻な事態が起こったとき、その場所に災難に遭った者の名前を付けるのが旅人たちの慣わしだ」[76] という。また、自然の驚異に胸打たれた場所に命名したり、名前のいわれを紹介したりしている [Santa Fe Trail, 76, 77, 134, 155, 169, 283; Prairie & Mountain Sketches, 65, 96, 102]。このような「命名」は、トマス・ジェファソン大統領 (Thomas Jefferson) による1803年の「ルイジアナ購入」(Louisiana Purchase) に当たり、大統領から事前調査の命を受けたメリウェザー・ルイス (Meriwether

Lewis) とウィリアム・クラーク (William Clarke) のルイジアナ探検以来の慣行となっていた。そこには、アメリカの未来の領土として認識し、それらを意識の中へ取り込む儀式的な意味合いが含まれていた。また、例えばサンタフェ・トレイル紀行において、フィールドが「日干し煉瓦」(adobe) 造りの建物が立ち並ぶサンタフェを初めて目にして、「粘土造りの町... まったくモグラ塚の群がりを思わせる」[202] と定義する。オレゴン・トレイル紀行においては、インディアンの頭皮剥ぎの行為は相手のプライド剥奪の最たるものであることを説明するとき、「北米インディアンの種族は... ほぼ一様に、骨相学上『自尊心』(Self Esteem [以下、テキスト内のイタリックについては、見やすくするために太字のイタリックにする]) が宿る器官からすぐに生えてくる人間の草[頭髪のこと] を求める」[76] とユーモラスな表現を使う。このようなユーモラスな表現には、異文化の生活様式や習慣などを初めて目にしたときに覚える異様さや奇妙さや不可解さや恐怖といった印象を和らげるために、あくまでも自分たちの言語と文化の概念枠での意味づけ・位置づけを試みることによって、すべて意識の中で掌握できるものであるという安堵感を得たい衝動が働いていた。さらには、そのような安堵感は異文化社会を自分たちの支配下に置けるという確信へと高まった——つまり、異文化を観察する以上のようなユーモラスな表現は、征服・支配の正当化をだれよりも自分たち自身に言い聞かせて納得させる方法、という意味合いを帯びてくるのであった(以上のフィールドの分析については廣瀬 [21-27] を踏まえている)。

しかし、二つの紀行文に見られるフィールドのユーモアをヘイルのユーモアと比較してみると、両者共に1840年代のマニフェスト・デスティニーをとらえているものの、ヘイルの場合は、フィールドのユーモアから感じ取れる詩趣溢れるロマンティックなトーンは皆無である。結論を先取りして言うならば、フィールドのユーモアには、マニフェスト・デスティニーに鼓舞された時代精神の勢いを反映して、マニフェスト・デスティニーを実現する、あるいは実現できるというロマンティックな夢に駆り立てられてアメリカが進む方向を探る視座が裏打ちされているとするならば、ヘイルのユーモアには、マニフェス

ト・デスティニーから距離を置いた、かなり冷めた視座が入り混じっている。言い換えるならば、マニフェスト・デスティニーに信を置いているようでありながら、背後で意図的にはぐらかしているとも思える「バーレスク」の視座を割り込ませている、ということである。

実際、『セントルイスのファズマへ』（“*To Phazma, up to St. Lewis*”——「ファズマ」とは『ピカユーン』と『レヴェイユ』でフィールドが使っていたペンネーム）と題する1844年8月10日付のパードン・ジョーンズの手紙（掲載された『ピカユーン』の日付は1844年8月16日。以下、とくに言及しない場合は、すべてジョーンズが手紙にしたためた日付を示す。また、ジョーンズが用いる言葉の特徴を強調するために、できるだけ原語を引用する）の中で、ヘイルはジョーンズに、フィールドはなぜ友人である自分 [ジョーンズ] に何も告げずにニューオーリンズを離れてセントルイス (St. Lewis [=St. Louis]) へ行ってしまったのか、と問いかけさせるとともに、ファズマ [フィールド] の詩に言及して、詩とは「言葉遊び」（ジョーンズは “judymots” [正しくは *jeu de mots=wordplay*] というフランス語を使っている [170, 171n <noted by Piacentino>]) にすぎず、「自分はとにかく詩は信用しない」(I don't bleeve in poetry enny how [169]) と語らせている。このようなヘイルの設定をフィールドの紀行文と併せて考えてみれば、ヘイルがジョーンズの口を借りて、フィールドの紀行文からうかがえる詩趣溢れるユーモラスな表現を揶揄するヘイルの「バーレスク」ととれる。このバーレスクの観点をとらえるために他に論拠の支持を仰ぐとするならば、同じくケンドールと親交があり、1842年11月30日付の『ピカユーン』に『パードン・ジョーンズ大佐訪問』（A Visit to “Curnel Pardon Jones”）と題したスケッチを掲載していたトマス・バングズ・ソープ（いわば、ヘイルとソープとの間に成立している「間相互テキスト性」の例。廣瀬 [262-64] を参照）がミシシッピ州ナッチェズで編集していた『コンコーディア・インテリジェンサー』（*The Concordia Intelligencer*）掲載の『極西部からの手紙』（*Letters from the Far West* [Aug. 1843-Feb. 1844]——合計12編からなる）も、フィールドの紀行文に対するバーレスクとなって

いる（この分析については廣瀬 [30-36] を参照）。つまり、いずれのバーレスクも、西方に横たわる大地は確実にアメリカのものになるというロマンティックな期待を基調としたユーモアに対して、刻々と移り変わる状況の中では、新天地獲得の夢は今一つ明確にとらえられるようなものではないと、たえず漠とした感情に付きまといわれているアメリカ人の内面を透かして見せている、ということにもなってくる。

フィールドとヘイルに話を戻せば、フィールドの紀行文のユーモアは『ピカユーン』の意図を支える方向に作用するのに対して、ヘイルの場合は『ピカユーン』の意図を明確に反映していない——それどころかその意図をくじく可能性もある——といった意味合いも帯びている。メキシコ戦争については、「従軍記者」としての視座と「ユーモリスト」としての視座が相補的ではないと思わせるヘイルのぶれた姿が見え隠れしている。

11ヶ月に及ぶ『ピカユーン』の従軍記者として百通以上もの記事を送ったヘイルは、「ウェストポイントの専門的な軍事教育に偏った記事を書いた」のであるが [Reilly, 251. 以下も Reilly, 251-52]、その経験があったからこそ、「軍事作戦行動、兵士、部隊や、各地の戦闘における軍装備品などについて非常に詳しい記事を書くことができた」。ウィリアム・J・ワース (William Jenkins Worth)、ザチャリー・テイラー、ウィンフィールド・スコットの将軍に対しては「好意的な記事」を書くと同時に、「マスケット銃を運ぶ骨と筋だけの兵士」に対しても「熱のこもった記述で称賛した」。また時にはメキシコ人——とくにメキシコの軍隊に対しては「軽蔑と不信を示した」が、「彼ら自身の社会にふさわしい習慣と文化を持っている」と理解するようにもなっていた。「全体として、メキシコ戦争の特派員として、ヘイルの報告の量と質においては、ケンドールに次いで二番目の位置にいる」というのである [以上、Reilly, 251-52]。メキシコの戦地マタモロスで発行された1847年1月8日付の『デイリー・ピカユーン』は、ヘイルの記事の「正確さ」(accuracy)を絶賛している [cit. by Piacentino, 23-24]。

もちろんヘイルは戦いの様子をユーモラスに描いたり、「自分を揶揄する

ユーモア」(self-deprecating humor) を用いて自分の恥ずかしい体験を告白したりしている [Piacentino, 22-23]。しかし、以下に見るように、「ユーモリスト」としてのヘイルによる『ジョーンズの手紙』は、「特派員・従軍記者」としてのヘイルの記事とは性格を異にしているのである。

II

『プランターズ・ガゼット』と『ピカユーン』との紙上合戦でヘイルは、相手の編集者のことを「ピック」[Pic] と呼びかけていたが、『ジョーンズの手紙』はこの「ピック」という呼びかけを採用して、「親愛なるピック」(*My Dear Pic*) で始まる編集者宛の書簡となっている。この「親愛なるピック」への初めてのジョーンズの手紙（初めてであることから、ここでは “*To the Picayune—Dear Sir*” [35] と、丁寧な呼びかけで始めている）において、マサチューセッツからやってきた「本物のヤンキー」(capital Yankee [35]) として編集者が紹介するジョーンズの次のような一節が、ジョーンズの素性の一端を明かすことになる：

I was a fool to come gaddin off down here, tu thousand miles, spending time and money, when father had enough of everything to eat and drink to hum, and wood enough to make a warm climate in his own house—and chink enough to hire a Frenchman to come and larn me, instid of my coming down here to larn to parly voo—“Ichabod,” said father to me one day last early of October, jist as we was gittin in the last load of pumkins—“Ichabod, you’ve ben botherin me about two years, to let you go down to Luzyanna, to larn to talk French. Now do you think you can take care of yourself, if I I let you go? Do you think you won’t larn to *duel*, and *gamble*, and *drink*? Do you think you won’t larn extravagant habits, and get murdered ’fore you come back?” “O.K.” says I, “father , O.K., don’t fear for me—I’ve ben to Bosting nine times in my

life and never was ketched in a scrape yet.” Well, the old gentleman finally agreed to let me start, and I packed up and sot off. [35]

北部マサチューセッツ州の片田舎の農夫の長男であり、おそらくジョーンズが一人前の大人として独り立ちできるようにという親心から、南部ルイジアナ (Luzyanna) へ下ってフランス語を学んでくる (to parly voo=parlez vous [you speak] French) という自分の希望を改めて問われたジョーンズは、大都会ボストン (Bosting) でも事故に巻き込まれることはなかったし、北部人が暴力的な南部社会の表象として挙げる「決闘、ギャンブル、酒」といった「突拍子もない習慣」(extravagant habits) には引きずり込まれない自信があると訴えて、父親の許可をもらう。しかし以下に続く内容では、ミシシッピ川を下る蒸気船上の人となったジョーンズは、「立派な服装の紳士」(handsom dressed gentleman) の巧みな誘いに乗って手を出してしまったポーカーで10ドルの負けを帰し、ニューオーリンズ到着次第返してもらう約束で20歳ぐらいの「若い未亡人」(young widder) に貸した20ドルの金も、教えられた住所へ赴くものの彼女の消息はつかめないのであるが、「おそらく彼女が住所を書き間違えたのだろう。しかし彼女は私の滞在先を知っているから、返事の手紙を待つことにしよう」[36] と自分に言い聞かせて自分を慰めている——世の中をまったく知らないお人よしの田舎者が、これまた古い価値観などがまったく意味を成さない南部フロンティア社会の表象として名を轟かせることになった「詐欺師」(confidence man) の餌食になる、という、当時よく用いられたほら話・担ぎ話 (トール・テール [tall tale]) などの様式と内容を踏襲している。父親がジョーンズを呼ぶ「イカボッド」(Ichabod [35]) という名前から、ワシントン・アーヴィング (Washington Irving) の『スリーピー・ホローの伝説』(“The Legend of Sleepy Hollow,” in *The Sketch Book* [1819-20]) において、村人によって担がれて追放されるよそ者の学校教師「イカボッド・クレイン」(Ichabod Crane) との繋がりをヘイルが暗示していることを読者が理解するのは容易である——当時よく知られていたこのアーヴィングのスケッ

チは南部のトール・テールにも影響を及ぼしていたことは明らかである。

『ピカユーン』に掲載された二つ目のスケッチで「イカボッド」[35]の本名が「パードン・ジョーンズ」(Pardon Jones [37])であると明かされるのであるが、その冒頭にピックが「ジャック・ダウニング (Jack Downing) やサム・スリック (Sam Slick) に大いなる敬意を表して」[36] ジョーンズを紹介する一文を用意する。ジャック・ダウニングとは、メイン州ポートランド (Portland, Maine) の編集者シーバ・スミス (Seba Smith) が自分の『デイリー・クーリア』(*Daily Courlier*) 紙上に登場させたヤンキーであり、『ジョーンズの手紙』は『デイリー・クーリア』に届けられたダウニングの手紙を掲載するというかたちをとったスミスの擬似書簡体スケッチ集『ジャック・ダウニング少佐の人生と書簡』(*The Life and Writings of Major Jack Downing*, 1833) を踏まえての創作であることは明らかである。同じくサム・スリックとは、カナダ・ノヴァスコシア (Nova Scotia) のトマス・チャンドラー・ハリバートン (Thomas Chandler Haliburton) による『時計製造技師、すなわちスリックヴィルのサミュエル・スリックの言葉と行ない』(*The Clockmaker; or, The Sayings and Doings of Samuel Slick of Slickville*, 1st series, 1837; 2nd series, 1838) が創り出したヤンキーである。『ジョーンズの手紙』の最初のスケッチが1840年12月2日付の『ピカユーン』に掲載された時には、これら「アメリカ北東部ユーモア」(Down East humor) として分類されるユーモア文学のジャック・ダウニングとサム・スリックはすでにヤンキーの代名詞的存在として知れ渡っていた。ピック——そしてヘイル——はこの二人に言及することによって、ヤンキーとしてのジョーンズの存在を際立たせようとする。

確かに正規の文法・語法を逸脱した言葉遣い、誤った綴り (cacography) や言葉の滑稽な誤用 (malapropism)——しかもそのような言葉遣いしかできない人間にフランス語を学ばせるという課題を与えること——や、他人にいともしのヤンキーのステレオタイプをそのまま採用していることになる。1840年12月16日付の3つ目の手紙でも、実際にこの地で放牧されていた特産の「タッカ

ポー牛」(Tuckerpaw beef—肉牛)に追いかけられた話 [38-40]、また1840年12月25日付の手紙では、故郷「湾の州」(Bay State—マサチューセッツ州のニックネーム)からやってきて、年明けの1月15日に結婚することになっているジョーンズの婚約者ジェルシー・パーキンズ (Jerushy Perkins) と共に、「読み書き算盤」や農業・酪農や料理・裁縫といった実用的な教育を施す学校設立の夢を語る話からして、ジョーンズのステレオタイプなヤンキー像がさらに際立つことになる：

But to cum to the pint in this letter : Jerushy Perkins that is, (Mrs. Jones that is to be) and I, is going to open a school in this state, for the meeleration of the risin generation—where all the useful and ornamental branches will be teached... I want to git 25 boys and then 25 guls for Jerushy.—The course of larnin will be as follows, namely :

FOR BOYS, —Readin, ritin, and rethmatic ; ridin horse to plough among corn ; the science of settin geese, turkies and hens, so'st to make all the eggs hatch ; the use of the globes. **Mechanics**—imbracin the art of making wooden clocks at short hand... **Moral Fillosofy**—showing how a pollytishnn can console himself arter he gits beet at an election...

FOR GALLS, —Reading, riting and rethmatic ; how to milk cows so'st to mot make them kick the milk pail over ; use of the globes ; how to churn butter without a dasher, and how to make white butter yaller 'thout dulteration [without adulteration].—**Needle-work**, imbracin the way how to cut cloth out of the inside of a coat, to mend the outside and not show... [41-42]

しかし、「若い世代の向上のために」(for the meeleration of the risin generation) というジョーンズが掲げる学校設立の高尚な目的と、読み書き算盤や日常生活を営む上での実習教育、加えて「政治家が選挙に敗れた際の慰め

方」といった突飛な学習内容とのギャップや、教育者としての資質を疑わせる綴り(“meelerration” [=amelioration] や “pollytishnn” [=politician])といった学校設立の主旨説明からして、ピックは、ジャック・ダウニングやサム・スリックに対して言葉どおり「敬意を表して」ジョーンズを紹介しているのだろうか？ それとも二人のヤンキーとジョーンズをいわば褒め殺して揶揄しているのではないか？——といった疑問が起こってくる。

このような疑問に対して答えを出す前提として、まず考慮しなければならないこと——それは、ジャック・ダウニングやサム・スリックのユーモア、すなわち二人を通してとらえられる「^{ダウニング・イースト・ユーモア}アメリカ北東部ユーモア」の特徴を今一度整理することである。そしてここで答えを先取りしておけば、彼らとジョーンズは必ずしもぴったりと重なり合うことはなく、彼らの間にずれている部分があることを見て取ったとき、そこにジョーンズの「旧南西部ユーモア」の担い手としての姿が浮かび上がってくるのである。

III

シーバ・スミスのジャック・ダウニングは、メイン州の(架空の)田舎町ダウニングヴィルから州最大の都市ポートランド (Portland) にやってきて、「蒸気船」のごとく「前進する」(*go ahead* [31]) ことこそ都会で生き抜くための方法であると教えられ、都会のテンポの速さに戸惑いながらも柔軟に乗り切っていく。そして都会の諸相がダウニングの単純素朴な視座でとらえられ、田舎言葉を用いて見たままに語られるとき、例えば仕組みが複雑にして重大であるとされ、元来は真剣・深刻に構えられる都会の経済事象が、実に単純で底の見え透いた茶番的なものになる——ダウニングが「株」(stock) を家畜 (stock) と取り間違えたり、“*liabilities*” (=liabilities [負債]) や “*imidies*” (=remedies [弁済]) と綴ることによって [50]、ダウニングの無知無学が笑われる、というよりも、むしろ金銭獲得に汲々とする都会の盲目的拜金主義が見透かされることになる。あるいはまた、政党間の権力闘争や政党機関紙同士

の論戦は「猛烈に」(full chisel) 追いかけて噛み合う犬の喧嘩同然で、自らを「リバプリカン」と名乗り、相手を「フェデラリスト」と呼び合って言い争っても、それらに「ナショナル」か「デモクラティック」かの「洗礼名」^{クリスチャンネーム} (chrissen names) を冠しない限りは、両者は「似たり寄ったり」(tu peas in a pod——「鞘の中に並んで納まる豆」のように「似たり寄ったり」) であり [87-88]、まったく無意味にして無益な争いだと揶揄される。あるいはまた、次のような議会における観察においては、ダウニングは田舎の農夫の言葉や単純素朴な視座の使用によって、複雑怪奇に映る政治の世界を丸ごととらえて矮小化する：

[These Legislaters] kept to work as busy as bees upon pieces of paper that they called Bills. Sometimes they voted to read 'em once, sometimes twice, and sometimes three times. At last the sun begun to shine so warm, that it made 'em think of planting time, and at it they went, passing Bills *by the gross*, [propably a mistake for *to be engrossed*, —editor,] till they settled 'em away like a heap of corn at a husking, before a barnful of boys and gals. And they've got so near the bottom of the heap, they say they shall brush out the floors in a day or two more, and start off home. I spose they wont mind it much if they do brush out some of the ears without husking; they've had their frolic and their husking supper, and I guess that's the most they come for. It seems to me, uncle Joshua, it costs our farmers a great deal more to husk out their law-corn every winter than it need tu. [74-75]

ダウニングにとって、政治情勢に関して「どの方向へ猫がジャンプするのか」(which way the cat will jump [38])——すなわち「形成を見極める」こと——などどうも無理なことで、結局、情勢は混乱のまま堂々巡りをしているにすぎない。ダウニングの視座が素朴で先入観念などにまったくとらわれないものであるだけに、読者は嬉々として共感をそそられることになる。

しかし、ダウニング自身が、政界の観察者に留まることなく、当事者としてそこへいったん顔を突っ込むことになる、読者の受け取り方も変わってくる。ダウニングは結局、メイン州の知事になりそこない、アメリカの大統領の座を射止めることなど及ぶはずもなく、彼の夢はすべて宙吊りのまま消えてしまう。アメリカ軍の「大尉」としてマダワスカ (**Madawaska** [1839年春に起こったメイン州と国境を接するイギリス領カナダ・ニューブランズウィックとの国境紛争〈アルーストク戦争〉の舞台となった地域。後述するように『ジョーンズの手紙』でも取り上げられている]) にてイギリス軍を撃退し、同胞の捕虜救出作戦ではナポレオン・ボナパルト (**Napoleon Bonaparte**) の再来を見せつけようと乗り込んでみたものの、イギリス軍が捕虜を人道的に扱っており [147-50]、血を流して武勲を立てる場がない。また「少佐」としてサウスカロライナ州の「連邦離脱論者」(**Nullifier**) の鎮圧に赴く計画も、ヘンリー・クレイ (**Henry Clay**) の関税妥協法案通過 (**Compromise Tariff of 1833**) によって片がついて実行の必要性がなくなり [192]、そのほか何事につけ、ダウニングの名を上げる機会がもう一歩というところでなくなってしまう。ダウニングはまさに荒唐無稽を演じる悲喜劇の哀れな道化的存在となり、ジャクソン大統領と共に笑われてからかわれ、今度は風刺の対象となる側に座らされる。つまり、ダウニングは自分の思うように行動する自由を与えられているようでありながら、実のところ、ダウニングの庇護者に当たる『デイリー・クーリア』の編集者すなわちシーバ・スミスによって担ぎ出されて、アンドルー・ジャクソン大統領の政治・政策に対する風刺・批判を目論むスミスによって終始監視・監督されている、独り立ちしえない操り人形的存在としての役割を全うせざるをえない、ということになるのである。

トマス・チャンドラー・ハリバートンの時計製造技師サム・スリックは、ダウニング以上に作者ハリバートンから距離を置かれた「北部ヤンキー文化の表象」とでも言うべき「ヤンキーの行商人」(**Yankee peddler**) である。スリックは人に「*お世辞を使い*」(**soft sawder**)、「*人間の性格*」(**human nature**)

[*1st Series*, 16; *2nd Series*, 21-3]) を見抜くことが成功の秘訣であると心得、ダウニングと同じく「前進する」(*go ahead* [*1st Series*, 31]) ことを心がけながら、ダウニングの言動のぎこちなさを克服し、ダウニングよりもはるかに抜け目なく、世間にも長け、姓の「スリック」(*Slick*) が示すとおり、滑らかに巧みに世の中を渡っていく人物である——いわば、「南部フロンティア社会の表象」としての^{コンフィデンス・マン}「詐欺師」(*confidence man*) に対抗して、「前進する」(*go ahead*) ことの先取精神に裏打ちされた「相手を出し抜く精神」の北部ヤンキー文化の表象とも言うべき存在である。

もっともそのような抜け目ないスリックも自国については憚ることなく単純に自惚れている側面も見せる。しかし同時に、物にとらわれない柔軟な視座によってアメリカの状況に距離を置いて批判的に眺めてもいる。例えばアメリカの二派對立による一触即発的混乱状況を次のように語る：

The Blacks and the Whites in the States show their teeth and snarl, they are jist ready to fall to. *The protestants and Catholics* begin to lay back their ears, and turn tail for kickin. *The Abolitionists and Planters* are at it like two bulls in a pastur. *Mob-Law and Lynch-Law* are working like yeast in a barrel, and frothing at the bunghole. *Nullification and Tariff* are like a charcoal pit, all covered up, but burning inside, and sending out smoke at every crack, enough to stifle a horse. *General Government and State Government* every now and then square off and spar, and the first blow given will bring a genuine set-to. *Surplus Revenue* is another bone of contention ; like a shin of beef thrown among a pack of dogs, it will set the whole on 'em by the ears. [*1st Series*, 51-52]

しかし結局、スリックは旅を共にするカナダのノヴァスコシアからやってきた紳士によって「自国への自惚れ」と「批判的な視座」は矛盾していると突かれることになる。確かにスリックは「自惚れ」(*conceit* [*1st Series*, 120]) の

塊である。他人の「自惚れ」は批判するものの、自分の「自惚れ」には気づいていないかのように、アメリカ国民こそ「最も自由で文明化した国民である」[1st Series, 120] と至るところで自画自賛する。しかし、その紳士から例えばアメリカ政府について褒められると、褒めるのは誤りだという態度を示して、結局は「あなた方は自分たちを理解することができない」[2nd Series, 120] という言葉で締めくくる。スリックにとっては、イギリスからの旅行者はとくにアメリカ人を理解できない連中、ということになっている。旅行者はアメリカにやってくる前からすでにアメリカについての考え方を決めており、ただその考えを証明できる事実を探し出そうとするだけ、というのである。共和国の臭いは鼻を突くゆえに、獅子鼻をした沖犬のように鼻を巻き上げて旅して回る「トーリー党の連中」や、つむじ曲がりて苦きって、春先に食べ物のなくなった熊のように飢えた不機嫌な「急進派の連中」、そしてアメリカは天国で、アメリカ人はサナギの状態を脱して崇高な存在に成長したと語る「楽天主義の牧師」等々、それぞれがおおよそ事実とはかけ離れたことを旅行記に綴る [2nd Series, 48-49]——アメリカ人はこういった旅行者に対して、アメリカ先住民が魚の乾燥台にカモメ (gulls) をおびき寄せて捕まえたように旅行者を「担いで」(gull) 彼らを笑いものにする [2nd Series, 49]、というのである。

スリックにしてみれば、担がれているとも知らずにアメリカの攻撃にやっきとなる旅行者の姿がはなはだ滑稽なのである。しかしながら、終始全体を取り仕切っているのはスリックではなく、この作品の作者ハリバートンである。ハリバートンはスリックによって「青鼻」(blue-nose) とからかわれるカナダ・ノヴァスコシアの人間である。ハリバートンは、イギリスからの旅行者を担いでほくそ笑んでいるスリックを描くことによって、アメリカ人の抜け目なさ、狡猾さを指摘し、アメリカに対する自分たちの注意を促し、またスリックの口を通してベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) の「貧しきリチャード」(Poor Richard) 張りの質素儉約の格言を示して、ノヴァスコシアそしてカナダ全体への忠告とすることを意図している。つまり、スリックはハ

リバートンの目的に沿って巧みに操られ、最終的にカナダの読者によって担がれ笑われる存在なのである（以上のシーバ・スミスとチャンドラー・ハリバートンの分析は、拙稿「アメリカン・ユーモアの展開——特にその担手としてのヤンキーの登場を巡って——」を踏まえている）。

IV

以上のようにジャック・ダウニングやサム・スリックに拡大鏡を近づけてみれば、以下に述べるように、パードン・ジョーンズが二人のヤンキーを忠実に引き継いでいるとは必ずしも言えない側面が見えてくる。

ジョーンズは1月15日の結婚式から10日後の手紙（1月26日付）で、妻のジェルシー（*Mistress Jones*）から、「物書きのことを考えるよりも、**ぜひ**政治に才能を発揮してほしい... 偉人の素質のある人だから、成功間違いなし」（*Parding, I **du** wish you would turn your thoughts from litterature, and employ your gifts in pollyticks... you was cut out for a grate man, and you'll succeed* [45]）と、これまで考えてもみななかったことを強く勧められ、しばらく思案した末、学校経営の夢はあっさり捨てて、空席になっているルイジアナ州第1選挙区（*the fust vacant deestrick in Luzyanua* [46]）から連邦議会議員に打って出ることを決意する。そのことが『プランターズ・ガゼット』の編集者、すなわちヘイルの耳に入り、ヘイルとジョーンズの間で交わされた手紙の抜粋が1841年3月17日付の『ピカユーン』に掲載される。それによれば、「[ジョーンズ氏（*Mr. Jones*）] は特定の政党に身を委ねるようなことはなかった」ので、「氏が当選を目指して活動することに対して支援を申し出るのは、われわれ[『プランターズ・ガゼット』]の中道（*our neutral course*）から外れることではないと考える」[51]と判断してジョーンズに働きかける。それに対してジョーンズは「合衆国で最も賢明にして洗練された新聞」（*that smartest and hansumest paper in the United States* [52]）である『ピカユーン』が最初に支援を表明してくれたことから、「だれであっても新しい友

人を求めて離れることはない」(I sha'nt leave it for no new frind [52])と、きっぱりと断る。しかし同時に、『プランターズ・ガゼット』に反対しているのではなく、それどころか「とても素晴らしい新聞」(a very nice paper [52])と評価し、もし自分の考えを知りたいければ『ピカユーン』から転載しても「版權の問題はない」と付け加える。そして『プランターズ・ガゼット』に年間5ドルの購読料も支払い、投票日が来たときに非常にいい感触 (pretty good taste) を示してくれれば、購読者を少し増やしてあげられるだろうと約束して返事を締めくくる [52]。

ジョーンズが『プランターズ・ガゼット』の所有者にして編集者であり、他ならぬ自分の生みの親でもあるヘイルに対して距離を置く——このようなヘイルの仕掛けは読者も直ちに察知できる。そして読者の暗黙の了解が得られることを心得たうえでの意図的なヘイルの仕掛けであるからこそ、『プランターズ・ガゼット』の編集者としても、ジョーンズの生みの親としても、ヘイルがジョーンズを解放していることを知らしめる戦略ともなる。同時に、ジョーンズと『ピカユーン』との間にも対等な関係を持たせていることを示す戦略ととらえることができる。実際、1844年1月13日付の手紙では、1815年にイギリス軍を撃退した記念日に当たる1月8日にニューオーリンズを訪れたジョーンズは、彼が心酔するニューオーリンズの英雄アンドルー・ジャクソン将軍 (General Andrew Jackson) の姿を自らに重ね合わせたい衝動から、今や時代遅れと見なされる耳の上まで突き出た襟を身に着けて通りを闊歩したことをピックが揶揄したことに対して、「謝罪に応じてくれない限りは、私の感情を傷つけた以上、二度と君の新聞をひいきにはしない」(..hurt my feelins, and I shan't patronize your paper no more... without you'll 'gree to polergize... [159])と激しい怒りの言葉を連ねている。しかし手紙の最後では、ウィリアム・エヴァンズ・バートン (William Evans Burton [ロンドン生まれの喜劇役者。この時期、ニューオーリンズで興行を行っていた。Edgar Allan Poeが編集していた雑誌 *Gentleman's Magazine* <1837-40>の創刊者としても知られている] <Piacentino, 161n>) が演ずる喜劇を楽しんだことも思い出して、

ピックに敬意を表す言葉——“your very hamble and independent sarvant, sir”——つまり「謙虚な腰の低い人間であると同時に、独立した対等な人間」([161] 下線は廣瀬による)であることを再確認する言葉で締めくくっている。この手紙が掲載された1月18日付の『ピカユーン』には、「率直に無条件にパードン・ジョーンズに謝りたい」[cited and noted by Piacentino, 161n] というピックの謝罪文も同時掲載されており、そのようなヘイルとピックによる「共同作業」は、他ならぬジョーンズ自身がヘイルやピックとの対等な関わりを楽しんでおり、その楽しみをヘイルやピックとも分かち合い、その楽しみが読者をも巻き込む戦略となっている。

上の『プランターズ・ガゼット』の記事をピックが1841年3月17日付の自分の新聞に引用する際、「機知に富み (witty)... 愉快な (facetious) [51]」という形容語を冠して立候補者の「パードン・ジョーンズ卿」(Pardon Jones, Esq. [51]) を紹介するのであるが、他ならぬジョーンズがピックやヘイルとの対等な関わりへの合意を前提として「機知に富み愉快な」役割をあくまでも意識的・主体的に演じている。それから3年後の、上に挙げた1844年1月18日付の新聞に載せた謝罪文でも、「愛想がよく、尊重でき、社交的で、面白く、好感が持てるパードン・ジョーンズ」(the amiable, estimable, social, comical and agreeable Pardon Jones [cited and noted by Piacentino, 161]) と評価している。このような対等な関係は、シーバ・スミスやハリバートンによって「機知に富み愉快な」役割を与えられて、彼らの演技指導のもとで行動する二人のヤンキーとは異なるところである。しかも『ジョーンズの手紙』全体にわたって再三再四、新聞編集者と対等な関係であることの確認作業を行なっているのに対して、二人のヤンキーにはそのような確認作業は皆無である。

付け加えておけば、1841年3月29日付の手紙 [55-57] の中に、当時ニューオーリンズで絶大な人気を博していた女性ダンサー (Fanny Essler [Elssler]) に対して「品がない」(indecent [56]) と批判するニューヨークやボストンの新聞編集者 (edditters [56]) に対するジョーンズの言及がある。ジョーンズは、「彼らは決まって大事を看過して小事にこだわる... この世に

は非常に多くのペテン師がいるではないか」 (...they strained at *that* gnat that is sartin! There is a good deal of humbug in this world, aint there [56-57]) とダンサーを慰めている。このようなジョーンズの新聞編集者への言及も、ジョーンズが編集者との関係をかなり意識していることの表れであり、それは、自分の手紙の内容についてはあくまでも自分に責任があることを公に確認しておきたいという間接的な立場表明ともとれる。つまり、編集者に従属する人間ではないことの自己主張の表れである。そして上に引用した文面に続けて「ニューオーリンズの編集者はあなた [ダンサー] に対してずっと **首尾一貫している (consistent)**」 [57] と付け加えて、北部の新聞との違いを強調しているのであるが、実は、このダンサー弁護の手紙は、前回の手紙 (1841年3月19日付 [53-55]) で、ミシシッピ川の蒸気船の船着場で選挙演説をしていたところへ、蒸気船からダンサーが降り立って聴衆を奪われたことから、ダンサーに批判めいた言葉を書いていた——そのことに対するジョーンズの謝罪の言葉から始まっていることからすれば、「ニューオーリンズの編集者」 (the editters to New Orleans [57])——すなわち『ピカユーン』の編集者——とて、そもそもその手紙を掲載していたことからして、必ずしも「首尾一貫している」とは言いがたいことをそれとなく匂わすことになっており、含み笑みを浮かべるジョーンズの顔も見え隠れしている。

このような顔は1842年12月19日付の手紙でもうかがえる——ここでも、「この偉大な州の高貴で、聡明で、公正で、有能な編集者部隊を高く一貫して信頼している」 (I have a high and 'bidin confidence in the noble, sagachus, incorruptible and talented edditorial corpse of this grate state [137]) と新聞編集者との関係を確認する言葉をしたためているが、ただ、「編集者部隊」を“edditorial corps”ではなく“edditorial corpse”、すなわち「編集者の死骸」(下線はすべて廣瀬による)と綴っている。対等な関係を前提としている以上、このような綴り方は無学をひけらかして相手に笑われるもの、というのではなく、ジョーンズが承知の上で綴っていることになる。しかもジョーンズの意図的な作業であることが読者にも伝わることを承知の上でのことである。そこに

相手をも巻き込んでの哄笑がわき起こる。ジョーンズは二人のヤンキーをそのまま受け継いでいるのではなく、ヤンキーを「演じてみせる」という、いわば「担ぎの手法」を用いて相手に臨み、しかも担いでいることを相手にわざとそれとなくちらつかせ、相手をも受け入れる用意があることを暗に示すことによって、相手に笑われるのではなく、相手を自分の方へ引き込む。ジョーンズは自ら「機知に富み愉快的」[51] 姿を意識的に、主体的に、さらには「作為的に」演出するのであり、笑いの主導権を握っているのはあくまでもジョーンズである——つまり、ジョーンズは「バーレスク」の巧妙な業師に他ならない。ジョーンズはジャック・ダウニングやサム・スリックがシーバ・スミスやハリバートンを乗り越えることができないのとは対照的である。編集者ピックそしてジョーンズの生みの親ヘイルも、ジョーンズを「本物のヤンキー」として「敬意を表して」二人の代表的ヤンキーと重ね合わせているように思わせながら、実はジョーンズと密かに協力あるいは「共謀して」ジョーンズを彼らからずらす、という「バーレスク」の仕掛けを施していることになる。

このようなバーレスクの仕掛けの例を付け加えるならば、ジョーンズのいとこであり、妻ジェルシーの妹ルース (Ruth Perkins) と結婚したサイモン・スポールディン (Simon Spauldin [正式には「スポールディング」<Spalding>]) が故郷の町「デッド・カウ・ブルック」(Dead Cow Brook) で組織する民兵砲兵部隊の大尉ネイサン・ポッター (Capt. Nathan Potter——この民兵軍とポッター大尉については後述する) の結婚を知らせる手紙を、ジョーンズの兄のジョン・ジョーンズ (John Jones) から受け取ったことについて、「ジョンの書いたものはあまり文法的ではない」(John aint very grammerful in his writins [129]) として、「それを少し手直しして」(I'll correct it a leetle [129]) 引用するというものの、正規の文法・語法を逸脱した言葉遣い、誤った綴り字や言葉の滑稽な誤用といった点で、ジョーンズの手紙とまったく同質のものでしかない——手直ししているとしても、どのように手直ししたのかまったくかわらない。すなわち自分の手紙の質についての詮索を笑いの対象にすることによって、そのような詮索の目をも曇らせてしまうの

であり、ジョーンズの“grammerful”という英語の迫真性と迫力・活力また視覚的効果が“grammatical”という英語以上にますます受け入れられるようになっているのである。

もう一つパーレスクの仕掛けの例を挙げておかなければ、ジョーンズと編集者の関係を『ピカユーン』や『プランターズ・ガゼット』に限ることなく、後でも言及するが、故郷の町「デッド・カウ・ブルック」の主に民兵軍に関する記事を掲載する（民兵軍の機関紙的な役目をしていると思われる）『愛国主義の殿堂』（*Temple of Patriotism* [79]）あるいは『愛国主義の塔』（*Watchtower of Patriotism* [87, 95, 100, 102, 121, 128, 129]）——これらの新聞はもちろんヘイルの創作であって実在したものではない——にも言及して、自分の主張の掲載を命じたことや、その記事内容の直接引用や要約を『ピカユーン』に「転載」している。またジョーンズがしたためた手紙ばかりでなく、妻や故郷の母親や兄や義理の妹やいとこや年配の友人ポッター大尉からの手紙として『ピカユーン』に掲載する。いわば自分を「拡散して」^{マルチフェイスティッド}多面的・多声的に仕掛ける方法を用いることによって、『ピカユーン』との関係に関してはジョーンズがあくまでも主導権を握っていることを繰り返して強調していることになる。

以上のようなことを踏まえてジョーンズの位置を改めて確認しておくとしたら、それは、『ピカユーン』に手紙を掲載し始めた時点から、ジョーンズは、ピックやヘイルとの協力あるいは共謀によって、ヤンキーではないことを——いや、もうヤンキーではなくなっていることを——故郷のマサチューセッツの住民、そしてだれよりも『ジョーンズの手紙』の読者に示していることになる。実は『ピカユーン』宛の手紙を目にしたことがあるという「ヴィクトリア女王」が、おそらく共感と軽蔑の入り混じった気持ちで「大いに笑って」（*She laffs a good deal* [63]）口にしたのではないかととれるジョーンズ評の言葉を借用して言えば、ジョーンズは今や「パードンの純朴さ（*Pardon's unsophisticated simplicity, as she calls it* [63]）」を払拭して、以下に見るように「南部人」として生まれ変わっているのである。

V

ニューオーリンズで迎えることになった最初の夏、「気候がくそ暑くなり、それに蚊が暴れ始めて、やつらのあまりにも多くの嘴を見舞わされるのは、物に動じない人間、いや、**神経質な**人間にとっては、悟りきって威厳をもってしても耐えられるようなことではない (The weather is gittin pesky hot, and the skeeters is beginnin' to cut up their didos and present their bills tu plentiful for a man of narve, or **narvous** man to bear filosofically and with dignity)」[62] という理由で、故郷へ避暑に戻るのであるが、ジョーンズはもはやヤンキーとしてではなく「南部人」として対応する。ルイジアナ選出の議員に立候補したという話が広まっており、ボストンまで辿り着いたとき、ボストン市長 (the Mare [66]—以下、引用箇所は1841年5月3日付の手紙 [64-67] より) から晩餐会への誘いがあり、また「ジョーンズ閣下夫妻の名前を登録する榮譽に与りたい」と希望していろいろな協会が近づいてくるのであるが、「決闘」(duellin) を支持するかどうかを尋ねてきた「無抵抗主義協会」(Non-Resistance Siety) や、「完全な断酒を誓わせようと人を送ってきた禁酒協会 (Temperance Siety)」には、「できるだけ人気上がるようにしよう」と (I tried make myself as poplar as I could) 入会したが、ただ一つ、奴隷所有者であるかどうかを尋ねてきて、もしそうなら黒人を全員解放するように求めてきた「奴隷廃止協会」(the Abolishun Siety) にだけは入会しなかった、というように、南部奴隷所有者としての自分の立場を堅持している。もっとも、「無抵抗主義協会」とはおそらく、「アメリカ反奴隷制協会」(American Anti-Slavery Society [1833-70]) の創設者の一人であったウィリアム・ロイド・ガリソン (William Lloyd Garrison) が、「無抵抗主義」や「女性の政治参加」を導入したかたちで、1839年9月にボストンに設立した奴隷制廃止の組織であることから、ジョーンズがそれに入会したというのは、ジョーンズの態度が曖昧であることをうかがわせる (以上、引用は1841年5月3日付

の手紙 [64-67])。

また、故郷「シェイディ・グローヴ」(Shady Grove) で、ジョーンズの唯一の敵である「ボストンからやってきた頬髯を蓄えた若い弁護士」で「厚かましく卑劣な顔」(brassy pettyfoggin face [pettyfoggin とは「いんちき弁護士」<pettiffogger>) を指す軽蔑表現) の持ち主 [70] ビル・フォックス (Bill Fox) が、ジョーンズの演説内容に口を挟んできて邪魔したり [70-72]、ルイジアナでジョーンズは「1317人もの奴隷を所有し... 12人もの奴隷監督 (ruffins) を雇って、連中に九尾の猫鞭 [a cat-er-nine-tails——こぶ結びのある紐を柄に取り付けた鞭] を振り回させている」と触れ回ったり [79-80]、挙句の果ては、ジョーンズを「ケープ岬の灯台守」(keeper of the Light House on the eend of Cape Horn——「ケープ岬」とは南米最南端のチリ領の小島にある岬のことであるが、ジョーンズはマサチューセッツの「コッド岬」[Cape Cod] のことを書き違えたのであろうか?) に任命するというアメリカ大統領の書簡と偽って送りつけてきたりして [86-87]、ジョーンズの前に立ちはだかろうとするのであるが、そのようなビル・フォックスに対するジョーンズの対抗手段は、南部開拓歴史の表象「ボウイー・ナイフ」(bowie knife) あるいは「大きな爪楊枝」(the big *toothpick* [71] ——the “Arkansas Toothpick” という呼ばれ方もしていたことによる) をちらつかせることである。「ボウイー・ナイフ」とは、ケンタッキー州生まれの辺境開拓者 (frontiersman) であり、アラモの戦い (Battle of the Alamo) で戦死したジェイムズ・ボウイー (James Bowie [1796-1836]) の決闘用の短剣として有名になっていたが、まさにジョーンズとフォックスの確執は、以後拡大していく南部人と北部ヤンキーとの対立構図を提示していることになる。

ジョーンズが南部人となっていることを示す例をもう一つ挙げると——連邦議会議員出馬を目指して遊説して回っていて日が暮れ、「玉突き場」(billiard room) で知り合った「素晴らしく親切な男」(a fust rate, good natered old feller) と「垢抜けている、太った女で、笑い太りしたかのように、楽しさいっぱいの顔をした (a fine, fat woman, that looked as if she got fat on laffin,

her face was so full of fun)」妻と4人の子供の家に泊めてもらうことになったとき、票獲得を目論んで、薄暗い家の中で、「本当に行儀がいいお子さんたち」(ra'al well behaved children)、「坊ちゃんたちとお父さんは何とよく似ていることか！」(What a *strikin* resemblance 'tween them boys and their father!)、「利口そうなお子さんたちで、本当に見事にあなたに似ている」(...they're handsum children, and they *du* look wonderfully like you) といった「お世辞」(soft soapin)を並べ立てるものの、しばらくして女の子が持ってきた明かりに照らし出された子供たちは「混血児」(*mulattos*)で、「真っ黒のニガーのように頭の毛が縮れている」(...their heads was as curly as the blackest niggers!!!) ことを知る。夫婦の間に子供はいなくて、黒人の子供は明らかに夫の浮気の結果であり、その子供たちを引き取って「おもちゃとしてかわいがっているようだ」(...they sort o' petted them little niggers for playthings) という。ジョーンズは「お世辞」(soft soapin) だったとはいえ、口づけをするという、自ら招いた「窮地」(scrape) をどのように脱したらよいかと途方に暮れる——そのようなジョーンズを見て妻は「息ができなくなってしまふほど笑う」(Miss Smith laffed so hard... that she most suffercated)。おそらく夫は自分に投票することはないだろうし、しばらくの間はジョーンズの「からかい」(joke) のために「妻は夫を尻に敷くことになるだろう」(I 'spect Miss Smith will keep the old feller under with that joke a good while) という感想で手紙を締めくくっている [119-20]。

ジョーンズは、彼の「お世辞」(soft soapin) が逆効果になって自分に跳ね返ってきたことを『ピカユーン』の読者に笑われることをそれとなく期待してこの出来事を綴っている。奴隷所有の南部人として、黒人に口づけをしてしまった大失態を南部白人男性の同胞に打ち明けることによって、おそらく同じような経験を共有しているのではないかと、ジョーンズから問いを返されるととらえる南部白人男性の読者の顔を想像して、ジョーンズは自分の気持ちを慰めているのであり、そのような分かち合いによる慰め的手段は同胞が取っている常套手段であるという前提をも共有していると考えられることから、慰

めと相まって、そのような共有意識が南部白人男性の奴隷制擁護のさらなる結束をも促すことになりうる。サム・スリックにとって、ヤンキーの十八番である「お世辞」(soft sawder)が通じなくなることは、スリックの人格がすべて否定されることに繋がる意味合いがあるのとは性格を異にしている。『時計製作技師サム・スリック』のユーモアは、スリックの「お世辞」がハリバートンやノヴァスコシアの住民に見抜かれているとは気づかず、自分の「お世辞」による詐欺師的才能をほくそ笑んでいる——そのようなスリックに対するハリバートンやノヴァスコシアの住民の拒否反応として生まれてくる。それに対して『ジョーンズの手紙』のユーモアは、「お世辞」による大失態を仕出かした自分をも距離を置いて笑い楽しもうとするジョーンズの姿勢から生まれてくる。

しかし、この話に含まれたユーモアをさらに考えてみれば、大失態を仕出かしたジョーンズ、あるいは黒人と似ていると言われて洪面をつくる父親など、南部白人男性だけが共有しうる「日常的経験」に帰せられるだけのものであろうか——ここでは、そうでないものも含まれている可能性のあることを、「離婚訴訟」の歴史を主にノースカロライナ州最高裁判所の判例に直接当たって分析した佐々木孝弘論文を基にして考えてみよう。この研究はノースカロライナ州のケースを分析したものであるが、ルイジアナ州においても基本的に当てはまると仮定してみる [以下、佐々木, 90-97]——イギリスの法律家ウィリアム・ブラックストーン (William Blackstone) の原則³⁾に従って、「一家の財産の管理権を夫が握り、子供たちを保護養育する権利と責任は父親のみに与えられた」[90] という、いわば「男性家長」[90]の制度は、ノースカロライナ

3) 佐々木は、「婚姻の結果妻となる女性が身をおくことになる法的地位」[佐々木, 90]の原則について、ブラックストーンの『イギリス法註解』(*Commentaries on the Laws of England*, vol. 1 [Oxford: Clarendon Press, 1765] 442) から次の一節を引用している:「婚姻によって夫と妻は法律上ひとつの人格となる。すなわち、婚姻期間中はまさに女性の存在自体が、言葉を替えて言うならばその法的実効性を失ってしまうか、少なくとも夫の法的存在の中に吸収されて一体化し、単一の人格を構成するものと考えられる。そして、結婚した女性は以後あらゆる行動を夫の保護の覆いの下で行なうことになる」[佐々木, 90]。

のみならず、南部全体の枠組みを構成していたと考えられるからである。それゆえに離婚も男性の思いのままに決定できなかった。夫婦どちらかの婚姻時における「性的不能」の継続の場合は別として、どちらかが相手を「遺棄」すること、また「姦淫」を犯すことを巡っては、離婚訴訟において、裁判所を納得させるよほどの理由がない限りは、「完全な離婚」（これに対して「部分的な離婚」すなわち「寝食分離」という判決があった）を認める判決が下るのはむずかしかった、ということである [91]。つまり、判決の大前提として、『「婚姻は決して分かつことのできない完全な結合である』という伝統的な結婚観」 [93]——「法律は婚姻の契約を『当事者間の完全な結合』と定め、『完全な結合』であるから『解消できない』としている」 [93]——があった。しかも、婚姻は「ただ単に夫と妻の間の契約に留まらない」 [96]——『「国家ももう一つの契約当事者」であり、夫婦が婚姻の義務を互いに果たすことは国家（州）の『最大の利益』がかかる問題なのであるから、当事者間の同意によって解消することはできないと論じて」、控訴側の請求を棄却することもあった [96]。『ジョーンズの手紙』が『ピカユーン』に掲載されていた時代の環境下では、「婚姻の重要な機能として妻を生涯扶養し続ける義務が夫の側に強く求められていた。妻を扶養する責任を放棄しかねない夫の身勝手から妻を保護するためには、まさに相手を『あるがまま』に受け入れ、文字通り夫婦の『完全な結合』であるから解消できないとすることが必要だった」 [97]。つまり、「伝統的な結婚観においては、当事者間の自由意志に基づく民事『契約』という側面よりも婚姻の中で得られる夫や妻の『地位』をひとたび手にした以上不変のものとして維持することに重点が置かれていたと言うことができる」 [97] というのである [以上、佐々木、90-97]。

このような離婚に対する厳格な規制がノースカロライナだけでなく他の南部社会にも存在したとすれば、ルイジアナにおけるジョーンズのユーモアは、黒人に口づけをした大失態を悔いるジョーンズや、黒人の子供とよく似ていると言われて洪面をつくる夫の個人的な大失態を笑うこと、また南部白人男性の経験の共有意識による、彼らの間での共感の笑いだけではなくてくる。おそ

らくそれ以上に、このような規制があるために、絶対的権威を誇示しうる立場にある南部白人男性とて強制束縛されている——そのことを改めて痛感させられ、自分の限界・弱さをひしひしと思い知らされている、いわば諦観の念が裏打ちされた引きつった笑いも含まれていることになってくる。そしてもう一つ、途方に暮れているジョーンズを眺めながら、夫に代表される南部白人男性に対する勝ち誇った気持ちに満たされて、「呼吸ができなくなってしまうほど笑う」妻——「しばらくの間は夫を尻に敷くことになるだろう」という感想をジョーンズに抱かせることになる妻——の笑いがある。離婚したい思いを密かに抱いていたかもしれず、そのような思いが高じて衝動的に黒人女性に不貞を働いてしまったのかもしれない夫は、その不貞を叙実に証明する「混血」の子供を養育しなければならないという、いわば「法的罰則」として、自分の大失態をこれからずっと世間に晒して生きざるをえない運命を背負い込まざるをえなくなったことに対する、妻の復讐めいた笑いが、このスケッチ全体に響き渡っていることになる。

ジョーンズは今や、南部白人の夫の立場や気持ちはどのようなものであるのかを理解できる南部人となっているのである。故郷を離れてニューオーリンズへ向かう蒸気船上で若い未亡人に貸した金を返してもらうために教えてもらった住所へ赴くものの、相手の消息はつかめなかったことについて、上でも引用したように、ジョーンズは「おそらく彼女が住所を書き間違えたのだろう——しかし彼女は私の滞在先を知っているから、返事の手紙を待つことにしよう」[36]と自分に言い聞かせて自分を慰めるだけである——この段階では、まったく世間知らずでお人よしな——「純朴さ (unsophisticated simplicity)」[63]というヴィクトリア女王の形容表現がぴったりの——ヤンキー以外の何者でもなかった。しかし、南部に腰を据え、妻も呼び寄せて所帯を持ち、ましてや南部の州を基盤にして政界に打って出ようとする中で、次第に世の荒波を感じるようになる。1841年3月19日付の手紙の冒頭では、「自分はまったく変わってしまった。野心、不安、仕事、病気——そういうものすべてのために、自分はまったく馬がポツ症にかかった後みたいになっている。今では失望落胆した

人間だ」(I'm so altered. Ambishun, anxiety, bizness and sickness—they all make me feel jest as if—that is—jest as a hoss looks arter he'd had a turn of the botts. Then I'm a dissypinted man [53]) と告白し、「この広くて冷たく、寒々として荒れ果て、汚らわしくて卑劣であり、極悪非道にして厳しく忌まわしいこの世界」(this wide, cold, chilly, desolate, ambomnerble, rascally, infarnal, dear, blessed world [53]) で頼れるのは『ピカユーン』の編集者だけである、と助けを求めている。またそれから9ヶ月後の1841年12月18日付の手紙の冒頭では、ニューオーリンズのエリス川近くの大通りで「三樽の乾燥させたハックルベリーの実と一樽のソーセージ [three barrils of dried huckleberries and a barril of sassingers] の行商にやってきて詐欺に遭った [90] ことなどの経験をも思い起こしながら、「出かれば必ず窮地に陥ってしまう... [しかし] 『どんなに立派な家族にも **事故** は起こる』とシェークスピアも言っている! (“**Ackaydents** will happen in the best regulated fammerlies,” as Shakespeare says [もちろんシェークスピアの言葉ではない])」ということから「**事故** が起こるのは立派な家族であることの証拠であるならば、私とジェルシーは完全な家族であることに間違いない」としたためている [91]。

混沌として不安定な状況にもまれて、もはや「純朴」ではなくなり、自分を見つめる目も養われたジョーンズにとって、例えば選挙遊説中に投宿した「混血」の子供のいる家庭の様子を綴るジョーンズを支えるもの——それが、自ら主導権を握ったジョーンズの、そしてそのようなジョーンズを送り出したヘイルの、バーレスクを特徴とする「旧南西部ユーモア」である。そのユーモアは、他ならぬユーモアの仕掛け人自身が仕掛けたユーモアの罠に自らもはまり込んでしまう——その危険性のあることを承知の上であえてユーモアを仕掛け、そのような仕掛けを行なっている自分をたえず意識して見失わないようにしながら、自分のよって立つ場を探る視座を高めてくれることになる。

VI

「旧南西部ユーモア」の「旧南西部」とは、アンドルー・ジャクソンが大統領に選ばれた時（1828）から南北戦争終結（1865）に至る30年余りの時代において、これまでの北部・南部の大西洋沿岸地域に代わって、新しいアメリカの歴史形成の中核となった地域を指す——主に、現在のヴァージニア州、二つのカロライナ州、ジョージア州内陸部から、ケンタッキー州、テネシー州、アラバマ州、ミシシッピ州、ルイジアナ州の内陸部、アーカンソー州、ミズーリ州の全地域のことであり、「タイドウォーター・サウス」(Tidewater South) と称せられる大西洋沿岸地域、そしてメキシコ湾沿岸地域に対して、「フロンティア・サウス」(Frontier South) として区分される内陸部の平野や山岳地域を指している。

アメリカはこの30年余りの時代に様相が一変した——無私の精神や公德心といった美德を重んじ、資質と能力を兼ね備えたエリートが政治をつかさどる貴族主義的共和政治の影が薄くなり、民衆が政治の主導権を握り、綱領を掲げて対立関係を鮮明に打ち出す現実主義的な政党政治が幅を利かせるようになった。また自給自足経済から市場経済への移行とともに、文明・文化の擁護者でありモラリストであることを求められる法律家を中核とする司法から、第一に実務処理能力に長ける法律家を要請する司法に、厳格なカルヴィン主義に基づく神絶対の宗派から、アルミニアニズムやアンチノミアニズムの色彩を色濃くする人間主体の宗派に、そして家父長社会の温情主義に基づく奴隷制維持の論理から、人種主義に基づいた論理に、といった大転換期を迎えた。これまでフロンティア・サウス一帯に住んでいた先住民がジャクソンによってミシシッピ川以西へ追いやられた後、開かれた広大な土地に、国内外から、さまざまな皮膚の色、言語、宗教、生活習慣、考え方を持つ人間がどっと押し寄せ、多文化社会を構成することになった。そのような大転換期のアメリカをとらえる当地のジャーナリズムが、ニュースや記録として情報伝達を行なうのと同時に、「言

業によるグラフィック」とでも言うべき様式で、ヴィジュアルにして想像力豊かに、そしてユーモラスに描いた無数のスケッチを同時掲載し、それに大いなる興味を示した北部ジャーナリズム（New York の W・T・Porter の *Spirit of the Times* など）が転載したり、大手の出版社（Philadelphia の Carey and Hart や T. B. Peterson など）が編集して単行本として出版することによって、後にマーク・トウェイン（Mark Twain）に引き継がれる「旧南西部ユーモア文学」というジャンルを生み出すことになったのである。

ただ、これまでの解釈は、そのような大転換時代の主役を務めるようになった「庶民」(the common man)、すなわち「粗野で野蛮なフロンティア人」が、これまでの価値観を破壊して、時代の混乱を招く張本人であると告発して風刺・揶揄する、という枠組みを指摘するものであった。彼らと関わる格調高い文語調の言葉を操る「自制心ある紳士」(a Self-controlled Gentleman [Lynn, 61]) が、そのような混乱を象徴する文法・語法規範を逸脱した破格的な土地訛りの言葉——すなわち「ヴァナキュラー」(vernacular)——を操るフロンティア人を「上から見下すかたち」(condescending) で、それぞれの政治的、社会的、宗教的、地域的立場から一方向的に風刺・揶揄する、というのがユーモアの本質であると定義した。そのような解釈に基づけば「民主主義」とはあくまでも「衆愚主義」に他ならず、フロンティア人こそそのような「衆愚主義」の権化に他ならないと見なした。「アメリカ東北部ユーモア」^{ダウン・イースト・ユーモア}の担い手シーバ・スミスやチャンドラー・ハリバートンにとっても、二人のヤンキーは結局このような「衆愚主義」の権化としての役割も担わされており、二人に対するとらえ方もおおかた「上から見下す」(condescending) という類のものである。

しかし、時代の激流は、古い価値観や一つの立場にのみ頼るという姿勢などたちどころに壊してしまい、「自制心ある紳士」の世界をも含めて渦の中に呑み込んでしまったのであり、そのような状況においては、たえず新しい居場所探しに奔走せざるをえなかった。そしてそのような状況においては、これまでのしがらみにこだわることなく、それぞれの立場の人間が対等に関わって、駆け引きや掛け合いを競演することを通して、共に新しいアメリカの意味づけ・

位置づけを模索する方向に身を投げ出す戦法の工夫を余儀なくされたのである——その戦法として生まれてきたのが旧南西部ユーモアだったのであり、それは、建国以来、再び白紙状態となったアメリカにおいて、新しいアイデンティティを見いだすための「探りのユーモア」としての性格を強く打ち出すことになったのである。

『ジョーンズの手紙』もこのような旧南西部ユーモア文学の範疇に入るものである——そのことを明らかにするために、次のような政界進出を目指すに当たってのジョーンズの立候補表明を見てみよう。これは、上に引用したジャック・ダウニングの議会観察の印象やサム・スリックのアメリカ混乱状況の印象と分かち合うものもあるが、ジョーンズの場合は、シーバ・スミスやハリバートンのように二人のヤンキーを操って、固定の視座で遠近法的にアメリカの政治の不安定な状況を風刺している、という意味合いのものではない。

For Congriss—from the fust vacant deestrick in Luzyanua, Pardon Jones, Esq., son of old mister Jones of the Bay State. Mister Joneses sentiments liberal and free, and founded on the principles of Washington—Jefferson—Jackson—Van Buren and Ginerall Harrison. Mister Joneses opinions about the banks is precisely the same that them grate men all entertained. Mister Jones will stick up, one side or t’other, for the tariff—but don’t like tu commit himself on that subject till he sees which way the cat is goin’ tu jump. Mister Jones will go in for the public lands. He is goin’ tu be the *people’s* man, and he wants tu be on the poplar side of every thing, for that is dimmercratic. Mister Jones will go in for all the Englishmen, Irishmen, Scotchmen, Dutchmen, Frenchmen, and all the forriners born and brought up in the United States. [46]

南部農業を基盤とする地域の住民となったジョーンズは、農業や自分で育て

た野菜などの行商 (peddlin' [46]) を営みながら、学校経営の夢を捨ててルイジアナ州選出の連邦議会議員を目指すに当たって、商業や産業の利益を優遇してきた「銀行」——すなわち第二合衆国銀行——の解体を実行した民主党の第7代大統領アンドルー・ジャクソンの支持を表明している。一方、「関税」——おそらく1842年に採択された「ブラック関税」(Black Tariff)——の支持表明は、ホイッグ党による関税引き上げを認めるというものである。また「公有地」の支持表明は、1841年の先買権法 (Preemption Act)、すなわち公有地に住み、ある程度の改良を実行し、1エーカー当たり1ドル25セントを支払うならば、160エーカーの土地を入植者に与えることを決めた法律を踏まえての発言であると思われる。また合衆国で生まれ育った外国人に対する支援表明は、1830年代末頃から急増する移民に対するアメリカ人の排斥感情、すなわち「ネイティヴィズム」(nativism) の感情が裏打ちされた表白ととらえることができる。ジョーンズはジャクソン自身やジャクソンを引き継いだ第8代大統領ヴァン・ビューレンを支持するかと思えば、ホイッグ党にも傾いている——「ハリソン将軍」すなわちウィリアム・ヘンリー・ハリソン第9代大統領 (William Henry Harrison) はホイッグ党初の大統領であり、就任1ヶ月後の急死によって引き継いだホイッグ党のジョン・タイラー第10代大統領も渋々ながらも「ブラック関税法」に署名している。

ジョーンズが言及する以上のような項目を今一度整理して時代背景を辿ると次のようになる——まず関税についてまとめれば、1828年にジョン・クインシー・アダムズ (John Quincy Adams) 第6代大統領によって署名された、いわゆる「唾棄すべき関税」(Tariff of Abominations) が高額の関税率であったがゆえにとくに南部から不満の声が上がっていたため、1832年にジャクソンは関税率を幾分下げた関税法を法制化したが、それに対するサウスカロライナ州の「連邦法無効化」(Nullification)——州の権益を守るために、憲法によって保証されている権限を連邦法によって侵害されていると州が判断した場合は、連邦法を無効にすることができる——という反発を招くことになったため、ジャクソンは武力行使も辞さない構えを示したものの、結局、翌年にヘン

リー・クレイの提案で関税引き下げによる妥協を行なった (**The Compromise Tariff of 1833**)。しかし、それではヨーロッパとの競争に太刀打ちできないと考えたホイッグ党がアメリカ産業経済の保護を打ち出して、関税を引き上げる「ブラック関税法」が承認されるに至った。

ジャクソンが引き起こした、いわゆる「銀行戦争」(**Bank War**)は、1833年に大統領に再任されたジャクソンが、選挙期間中からの争点であった第二合衆国銀行の特許について、特許機関の満了(1816年に認可を受けた合衆国銀行の特許期限は1836年まで)を待たずして見直しを行なったことに端を発した。連邦政府の国庫金を無利息で預かる合衆国銀行は金持ち階級や権力者優遇の独裁機関になっているゆえ憲法に違反すると攻撃したジャクソンは、政府の預託金を引き上げ、民主党(1832年にデモクラティック・リパブリカン党を改名)の系列の州法銀行(**pet banks**)に分与移管した。合衆国銀行の支配から自由になり、信用貸しが容易に行なえるようになった結果、公有地の売却額がうなぎ登りとなって土地投機ブームが沸き起こった。しかしやがてそれらの銀行が発行する紙幣(**shin plasters**)の種類や流通量の増加によるインフレや土地価格の高騰を招くことになった。ジャクソンはそのような状況に歯止めをかけるために、1836年7月11日、公有地購入は紙幣ではなく、金貨あるいは銀貨に限るとする「正貨流通令」(**Specie Circular**)を發布した。しかしこの政策が裏目に出て、土地売却の急減や銀行経営の行き詰まりを助長することになった。そして、ジャクソンを引き継いだマーティン・ヴァン・ビューレンが新大統領に就任して(1837年3月4日)から2ヵ月後(5月10日)に財政パニックに陥り、1919年以後の経済恐慌が起り、6年にわたる不景気に突入することになったのである。このような不景気の時代を迎えた状況の中で、外国人移民に対する反感も募ることになった。「マニフェスト・デスティニー」の機運が高まるにつれて強まってきた「国家意識」(**nationalism**)が外国人に対する感情を先鋭化させることになった——つまり「ナショナリズム」と「ネイティヴィズム」が表裏一体となってアメリカ人の内面をますます強くとらえることになった。ジョーンズが手紙にフランス語を散りばめるのも、これまでアング

ロサクソンが大多数を占め、英語を日常語としていた北部マサチューセッツ出身のジョーンズが、かつてフランス領土であった地で、アメリカ人は多文化の中に生きる存在であることを痛切に意識したことの表れであると考えられることができる。

以上のように整理してみれば、上に引用したジョーンズの態度表明が一貫性を欠いていることが改めて確認できる。ただ、「…猫がどちらへジャンプしようとしているか見極めるまで自分の態度を決めたくない (...don't like to commit himself on the subject till he sees which way the cat is goin' to jump)... 自分は庶民派の人間になるのであり、何事につけても支持の多い側につきたい——それが民主的だから」[下線は廣瀬による]と語っているように、ジョーンズの最終的な態度表明はあくまでも民衆によって決まる、としている。しかしこれは、ダウニングが「猫がジャンプする」(the cat will jump)[下線は廣瀬による]方向を自分では見極めることはできず、ただ自分を省みず状況に流されるのとは異なり、上に述べたようなバーレスクの仕掛けを行なっていることを念頭に置いて読めば、自分に距離を取って、自分をも客観的にとらえようとする広くて柔軟な視座を兼ね備えていることを暗に示す言葉と受け取れる。その点、ジョーンズによるダウニングと同じ表現——「猫がジャンプする」方向の見極め——の使用はダウニングに対する揶揄になる。

ハリバートンとの関連で言えば、学校設立の際の教科の一つにジョーンズが「木製の時計を作る技術」[41]を挙げているのは、木で作った動かない偽の時計を売りつける巧妙な詐欺師というヤンキーのステレオタイプを踏まえてのことであり、ハリバートンの「時計製作技師」(clockmaker)サム・スリックを念頭に置いていることを暗に示しながら、そのことを何気なく口にすることによって、ジョーンズは、ハリバートンの「ヤンキーの詐欺師」とは異なることをそれとなく仄めかして、自分をヤンキーとしてとらえようとする視座をはぐらかすことになっている。また、「虚栄心」(vanity)は、「偉大になり、立派になる道の前に立ちはだかる大きくて致命的な障害物であって... 自分を賢いと感じ始めて拡大眼鏡を買いにいけば、近眼になってしまう (near sighted)

のはよくわかるだろう... 虚栄心の **染み** は私の心の中には一滴もない」(without creatin' a single **sumarkee** [フランス語の *sur marque*] of vanity in my mind) [62] と語っていることから、ハリバートンのヤンキーの「自惚れ」(conceit)とは異なって、ジョーンズは自分を心得て冷静に自分を分析できる人間に成長していることを表白しているともとれる。

つまり、ジョーンズの一貫性を欠いた立候補表明は、政治の世界に対するジョーンズの無知・素人振りを暴露しているのではなく、むしろ刻々と変貌し流動するアメリカの姿をそのまま映し出しているのであり、ピックや読者、そしてヘイル自身をも含めたアメリカ人の多くを巻き込んで、「民主党」や「ホイッグ党」の政治問題、土地や銀行や関税の経済問題、先住民や黒人や外国人移民の人種・民族問題などがますます多極化して複雑になり、「マニフェスト・デスティニー」を明確に把握できるどころか、ますます曖昧模糊としたものとなっている——そのようなアメリカをシーバ・スミスやハリバートンのような固定した視座でとらえることはもはや不可能となっていることを表白している、と解釈できる。そして民衆迎合の日和見主義的な表明も、優柔不断な候補者と決めつけることはできず、それよりも他ならぬその民衆の一人であることにかわりないジョーンズ自身が、他者との駆け引き・掛け合いに打って出て、自分の居場所を探ろうと仕掛けている、ととることができる。ジョーンズは、「広くて冷たく、寒々として荒れ果て、汚らわしくて卑劣であり、極悪非道にして厳しく忌まわしいこの世界」[53])を生き抜く上で、迎合することの危険性も承知できるようになっている。

上でも言及したが、『ピカユーン』にスケッチを掲載し始めて4ヶ月後に、『プランターズ・ガゼット』の編集者すなわちヘイルが、立候補を表明した「パードン・ジョーンズ卿」(Pardon Jones, Esq. [51])に対して、『プランターズ・ガゼット』が「中道」(neutral course)の新聞であることを強調して、「特定の政党に身を委ねるようなことはなかった」ジョーンズに、『ピカユーン』のような書簡を『プランターズ・ガゼット』にも掲載してほしいと依頼するのであるが、「中道」、「特定の政党はない」という表明も、確固たる基盤の定まっ

ていないアメリカの政治事情を裏書しているともとれる。

そのような状況において、ピックそしてヘイルの援助を得ながらも、対等な関係を維持するためにそのような援助者に距離を置くだけでなく、時には自分をも距離を置いて見つめる、冷静あるいは冷めた視座をも通して、自分のそしてアメリカの進むべき方向、よって立つ場を探っている——そのような視座を支えているのがジョーンズのバーレスク調のユーモアである。今やジョーンズは、「純朴な」(unsophisticated[ヴィクトリア女王がジョーンズを形容した“Pardon’s unsophisticated simplicity” [63] という表現から) ジャック・ダウニングやサム・スリックとは異なって、あくまでもピックやヘイルと対等にそのような探りを入れる「旧南西部ユーモア」の「したたかな」(sophisticated) 操り手となっているのである。

最初の立候補表明から2年後の1842年12月19日付の手紙では、より具体的に選挙公約を表明している——ミシシッピ川に運河を掘って川を二つに分断し、航行の完全平等化(an equal sheer of navigation)をはかる。堤防を築き、ミシシッピ川に二本の鎖を張り渡して航行費を支払わない船舶の進入を禁止するという「蒸気船法」(a steamboat law)を制定する。すべてのプランターのニューオーリンズ行きの作物の運賃は半額とし、またプランターのための必需品の運賃はすべて無料とする。ルイジアナの有権者である船長には法的規制を免除する。ルイジアナ州の有権者である民兵軍の将校は、メキシコと隣接しているという理由で、正規軍と同じように国から給与が支給されるようにする法案を提出する。国営銀行については、「クレイ氏とヴァン・ビューレン氏に全面的に賛成する」… 余剰金分配法と破産法(Distribushun and Bankrupt laws)については「同じ愛國的進路」(the same pattriotick course)を取る。公有地のミズナラの木を売却した収益は、ルイジアナの若い世代の教育費に当てる… 陸軍、海軍、そして民生機関の大多数の役人はルイジアナの有権者から抜擢する、といったものである [136-37]。

大河に鎖を張り渡すというナンセンスを承知の上で提案するジョーンズの

「自己嘲笑」(a mockery of himself [Piacentino, 138n]) や、銀行政策ではクレイとヴァン・ビューレンとは対立していることを承知した上で両者への賛成を表明するジョーンズの、わざとらしいしたり顔が垣間見えるところにも、政治批判というよりも、混沌とした複雑極まりない政治や社会情勢を合切丸ごととらえて、合切を笑いの渦の中に巻き込んで突き崩そうとするバーレスクの操り手の視座が働いている。

そして、上のような選挙公約表明に付け加えて、「*自分の立場を規定する (... tu define my position)*」とするなら、*旗幟を鮮明にしない*ような人間では決してない (I aint no *non-committal*)」[137] と強調しているのであるが (イタリックは原文のまま)、イタリック体による強調表現は、曖昧な態度表明に終始していることを承知の上であることを繰り返して灰めかす手段であり、しかも周りの人間そして読者がそのことをすでに了解していることを前提としての提示であることから、読者もジョーンズの世界に引き込まれて、混沌とした状況をジョーンズと同じ視座で眺める行為に参画することになるのである。

さらに、上の選挙公約と「*旗幟を鮮明にしない*ような人間では決してない」という態度表明から半年後の手紙 (1843年6月14日付)——自分も含めて三人の候補者の対決になっていることを報告し、自分への投票を改めて訴えている——では、そのような態度表明を行ないながら袖の下での忍び笑いを隠しきれなくなって、周りを哄笑の渦に巻き込むことになるジョーンズのバーレスクがさらに強まっている：

I haint no doubt but what I could beat Elam and Dawson both, though 'twould be *one* agin *tew*. I've ben a candydate as long as ither of 'em, but I *won't* run on party grounds. I *decline* runnin *agin* 'em, but I'm goin' tu run on my own hook—kinder *between* 'em. I run on *rejected principles*—that is to say on principles rejected by *them*. One of 'em is a *tariff* man, and tother is anti-tariff; I'm a *duty* man. One of 'em wants a *bank*, and tother don't. I want *money*. One of 'em likes the *credit* system, and tother wants tu see it done

away with ; I'm for payin as you go along, if you can't get credit. One of 'em wants a *bankrupt* law, *and so does 'tother* ; I'm for fixing things so'st there should be no need of sich a law. They're both economical men, and don't dress up much ; I go in for dressin up putty smart so'st to encourage the tailors and shoemakers, and the rest of the mechanics... They both belong tu the temprunce society, and don't drink nothing but ice-water ; I go in for egg nogg and blackstrap, so'st tu encourage tho members of the *bar*... Tu wind up, —I ardently hope and expect tu git all the blank votes that is a goin tu be pold in this deestrect for a member of Congress. I call on the people of the third deestrect tu, 'stain me in this way. Don't *waste* your votes. I know you mean tu poll a good many blank votes : *don't du it*—but when you fill out your tickets, and don't feel like voting for the principles that Elam and Dawson professes or *practices*, just put in the name Curnel Pardon Jones for Congress. *He* won't betray you : *he'll* be jest as perlite tu you arter he's elected as he is afore. Remember this. [153-54]

二人の対立候補の「主義」(principles)のどちらにも賛同しない有権者の「白票」を求めるジョーンズが二人の間に割って入って持ち込む「主義」の内容に見るナンセンスな言葉遊び風バーレスク——tariff vs. anti-tariffではなく duty ; “bank” (第二合衆国銀行) 賛成・反対ではなく “money” (お金) が欲しい ; 両者は「禁酒協会」に属していて「氷水しか飲まない」のに対して、ジョーンズはエッグ・ノグ^{フラックストラップ}やコーヒー等々——は、つまるところアメリカの主義の曖昧さを見透かしていることになる。

そして、最後までバーレスクの操りに徹したジョーンズは、3ヵ月後の手紙(1843年9月13日付)において選挙戦に敗れたことを淡々と報告するとともに、以後はメロン作りの農業に鞍替えして「メロン栽培方法についてルイジアナに革命をもたらす」(...to revolutionize Luzyanny in the art of raisin melons [156]) ことを約束するのである。

論旨を繰り返して整理すれば、とくに30年代半ばすぎから始まった旧南西部地域の土地投機ブーム——これを代表的な旧南西部ユーモリストの一人ジョセフ・G・ポールウィンは「にわか景気」(**flush times**)と名づけた——に刺激されたマニフェスト・デスティニーをとらえ、そのようなブームをさらにかき立てる多くの政治的・経済的・社会的事象——ジョーンズが立候補表明で掲げる項目、すなわち第二合衆国銀行問題、関税問題、公有地問題、正貨流通令、外国人排斥感情(外国人移民の問題)や、加えて先住民追放の問題、奴隷制の問題など——を絡めて、複雑極まりない混沌とした状況を丸ごとバーレスクの渦の中に巻き込んでアメリカの新しいアイデンティティを探る姿を描いているのである。

ほかに立候補表明の項目に関するバーレスクの例を拾ってみよう——「マルディグラ」(**Mardy Graw [Mardi Gras]**)のカーニバルで、ジョーンズがかぶった仮面に驚いて逃げる妻ジェルシーを追っていく際に木にぶち当たったためにできた鼻の傷は「フロリダのインディアン (**the Frodiy Injuns**)と戦ったかのように見えた」[48]というの、ミシシッピ川以西への強制移住に抵抗したフロリダのセミノール部族 (**the Seminoles**)が1835年から1842年に至る7年にわたって政府軍に立ち向かったことに言及するものである。「郵便局長」(**Poce massa**)からジョーンズに送られてきた『ピカユーン』紙を持ってきた使いの礼として「紙幣」(**shinplasser**)を要求する黒人の召使に1セント硬貨2枚を渡したところ、硬貨を見たことのない黒人は「ボタン」(**copper buttons**)と間違えて、ジョーンズに小言を掃き捨てて退く描写は、土地投機を促すことになった濫発の紙幣 (**shinplaster**)とそれを禁止したジャクソンの「正貨流通令」の問題を踏まえている [49-50]。故郷の「デッド・カウ・ブルック」で民兵砲兵部隊の隊長を務めるサイモン・スポールディングが、6マイル離れた町 (**Clingtown**)の「クリングタウン・タッチ・ミ・ノッツ」(**Clingtown Touch-me-nots**)のライフル部隊との合同で「フロリダの沼地戦争」を再現した「軍事訓練」[76-77]を催したというのも、セミノール部族が強制移住に抵抗して戦った「セミノール戦争」(**the Second Seminole War**)

[The Florida War], 1835-42) への言及であり、「インディアン」(the Injuns) は大砲を所持していなかったことから、サイモンの砲兵部隊がセミノール族を引き受けるのは納得できなかったが、「クレイ氏の銀行法案のように妥協して」[77] くじ引きで決めたというのは、ジャクソンの第二合衆国銀行廃止に反対するヘンリー・クレイ (Henry Clay [ケンタッキー州選出の上院議員]) への言及である。また、1843年3月から1年以内にキリストの再臨があり、世界が終局を向かえることを説いて回っていたウィリアム・ミラー (William Miller) の新興宗派 (Millerites) を「四月馬鹿」(April fool) と一笑に付すバーレスク [145] は多くの旧南西部ユーモリストと分かち合っている (廣瀬, 183, 191, 417, 418-19, 455, 456)。

もう一つ、ジョーンズがこだわるのは、ジョン・クインシー・アダムズの話題である。サイモン・スポールディンの民兵軍の大尉であり、ジョーンズの年配の友人でもあるネイサン・ポッター (Captain Nathan Potter) が、「絞首門」(gallus [gallows]) を作り、そこに置いた椅子に、ポッター自身の古着に干草を詰めて作ったジョン・クインシー・アダムズ (John Quincy Adams) ——大統領の任期を終えてから、今は下院議員になっている——の人形を座らせ、アダムズの前には古着で作った黒人の赤ん坊を抱かせて、頭に「権利請願」(RIGHT OF PETITION [103]) と書いた紙をつけて、火あぶりの刑を模した儀式を執り行なったことを、妻ジェルシーの妹ルースが手紙で知らせしてきた——そのことをジョーンズがピックアップにしたためているのであるが、それは、ウィリアム・ロイド・ガリソンたちによって1831年から訴え続けられてきた奴隷制反対の「請願」について、下院や議決機関で議論することなく棚上げにするという、1836年のいわゆる「緘口令」(gag rule) に対して、憲法修正第1条に述べられた「請願権」を侵しているとして、撤廃を求めたアダムズのこと

に言及するものである。

アダムズへの見せしめの儀式において、ポッターは、かつては「学問と知性を持った巨匠——愛国者の息子 [ジョン・アダムズ第2代大統領の息子] で、マサチューセッツ州の誇り」[103] であったアダムズが、今や「威厳を忘れて」

(you forgot your dignity) 大統領から下院議員となり、「騒々しい政治家たち」(noisy pollytishuns) に囲まれて「頭は走馬灯のように移り変わり、心は冷酷無情なものとなり」(...your head was turned into fantazzymagories [phantasmagoria], and your heart was turned into beef's gall)、「**権利の請願**のことを騒ぎ立てることになった」(You've made a great fuss 'bout the **right of petition**) と告発する [103-04]。しかし、ポッターは、アダムズは「**心の奥まで** 奴隷廃止論者 (abberlisionist) でも反連邦主義者 (anti-Unionist) でもなく——実は **軽薄な人間 (trifler)** であり、あまりにも多くの野心と学問のために気が狂ってしまったのだ」(ポッターは、かつては誇り高きアダムズの存在証明であった「学問」が、今ではアダムズの人心を惑わすもとしてとらえていて、演説の内容が矛盾している [104]) というように、アダムズの奴隷制擁護の姿勢はアダムズ自身の冷静な判断に基づいているのではないと突っぱねる。そのようなポッターの意見をジョーンズも認めていて、「**最初、請願**について自ら窮地にはまり込んでしまったために」(He jist got himself into a scrape 'bout them **petitions**, at **fast** [104]) 態度を翻すことができなくなって、そのような姿勢をとらざるをえない羽目になってしまったと分析する。これに続けてジョーンズは、これと同じようなことがジョン・カルフーン (John Calhoun) にも起こった、と次のような逸話を紹介して手紙を締めくくる——カルフーンが「フィラデルフィア」(Fellydefy [Philadelphia]) でテーブルに座って一人で酒を飲んでいるとき、数人の男たちが周りで「サウスカロライナの連邦法無効論者」(the South Kerliny Nullifiers) のことを「泥棒や悪漢」(thieves and scoundrels) と騒ぎ立てる。それを諫めようと、カルフーンが自分もサウスカロライナ出身であることを名乗り出たことに対して暴力ではむかわれたのだが、それが引き金となって、徹底した「連邦法無効論者」になっ・て・しまっ・た、というのである [104-05]。このようなジョーンズの手紙の内容からすれば、アダムズやカルフーンの主義主張も、それぞれが明確に把握してのことではなく、その時その場の状況に流されて陥った結果であることを暗に示していることになる。ここにおけるパーレ

スクはアダムズやカルフーンを攻撃している、というよりも、ますます混沌とした状況に巻き込まれていくアメリカ人の主義主張の曖昧さを透かして見せることになっているのである。付け加えれば、ジョーンズのアダムズに対するパーレスクとして、選挙公約の一つに「もし私が選ばれたなら、大統領と画策してジョン・クインシー・アダムズをアフリカへ海外伝道に追いやってしまおう」(I shall, if I'm elected, intrigue with the President tu have John Quincy Adams sent on a forrin mission tu Afriky [136]) というものも挙げている。

平民の大統領ジャクソンの登場によって民衆の力が無限大に広がっていく時代において、アダムズはおそらくそのような時代には受け入れられる存在ではなくなっていた。スミスやハリバートンが生み出したヤンキーのユーモア、すなわちアメリカ東北部ユーモア^{ダウン・イースト・ユーモア}は、つまるところ、ジャクソンの前任者アダムズ大統領で終わるいわば貴族的共和政治の時代を支えた伝統や道徳をよりどころに、ジャクソン以降の時代が衆愚政治に墮したととらえて風刺する、という意味合いを帯びている。

それに対して、領土拡張の夢実現によるアメリカの繁栄が神によって約束されているというマニフェスト・デスティニーの機運が高まる中、それを具体的に意味づけ位置づけるうえで、綱領を掲げて対立関係を鮮明に打ち出す現実主義的な政党政治が生まれたのであるが、その対立関係がますます複雑化し混乱して、具体的な位置づけ・意味づけもおさら不確かにして曖昧模糊となった。それによって南北のさまざまな利害衝突・対立が深刻化し、南北戦争に向かって留まることなく加速するような状況を生み出した。しかし同時に、そのような状況であるからこそ、さらに拍車を掛けて、それぞれの立場がそれぞれの利害や思惑に執着してマニフェスト・デスティニーの自己解釈を試みた。そして延々と続く自己解釈の循環がいつそうとらえどころのない混沌状況を引き起こすことになったのである。そのような状況の中でかろうじてであっても自分を支え、少しでもより確かな意味・位置を求めるために、自分自身に対して

も意識の中で距離を置いたところから、あくまでも自分の方からしたたかに仕掛けて作り出す混乱の渦の中に自分も周りもすべて巻き込んで、自分のそしてアメリカの居場所探しのための再位置づけを試みる衝動に駆られた——その渦を作り出す上での表現手段となったのが旧南西部ユーモアだったのであり、その意味合いにおいて、アダムズやカルフーンをとらえるジョーンズのバーレスクも大方の旧南西部ユーモリストのものを分かちもっている。ジョーンズには二人のヤンキーのようにアダムズの時代感覚は記憶の中にもない。仮にあったとしてもそれは時代遅れの感覚であって、居場所探しには何の役にも立たない。ジョーンズはそのことを肌染みついて悟っているがゆえに、ポッター大尉のアダムズ批判に同調している。アダムズに対するバーレスク調の批判は、二人のヤンキーのアメリカ東北部ユーモアとジョーンズの旧南西部ユーモアとの違いを提示していると言える。

上で取り上げたジョーンズの最初の立候補表明に見たように、ジョーンズは民主党のジャクソンやヴァン・ビューレンの信奉者であると同時に、ホイッグ党のハリソンの支持をも表明している [46]。ミシシッピ河畔での選挙遊説でも、「ここは自由の地であり、われわれの先祖はわれわれの権利を守るために血を流して戦った。ハリソン将軍もワシントン将軍もジャクソン将軍も力を合わせて戦った」と、所属政党を超えて賛辞を送っている [55]。ハリソン大統領を引き継いだ「^{ミスター・タイラー}タイラー氏」(John Tyler——第10代大統領 [ホイッグ党]) はジョーンズの「友人」の一人であると公言して憚らない [136]。また、テキサス共和国併合を考える際には、次のような政治家や軍人や裁判官など「偉人」(great men [166]) の名前を列挙している——「クレイ [Henry Clay]、ウェブスター [Daniel Webster]、ジョン・タイラーと彼の息子のボブ、ドッジ将軍 [Henry Dodge——軍人。ウィスコンシン準州知事から上院議員になり、ウィスコンシン州設立に貢献した]、剛勇者 [Old Ironsides——アメリカ海軍最初のフリゲート艦の一つ USS *Constitution* のこと、それとも “Old Ironsides” のペンネームを使って *Washington Globe* に記事を掲載していた

Jess E. Dow のこと〈Piacentino, 168n〉)、キャス [Lewis Cass]、カルフーン [John C. Calhoun]、ビブ判事 [George Mortimer Bibb]、ディック・ジョンソン [Richard Mentor Johnson]、ウッドバリー [Levi Woodbury]、ヴァン・ビューレン [Van Buren]、タウソン将軍 [おそらく1812年戦争を戦った General Nathan Towson [Piacentino, 168n]、そしてとりわけジャクソン将軍] [165—66] といった人物である。そしてこのあとにちゃっかり「今度は自分の番だ」[166] と付け加えている。「自己を卑下する控えめなポーズ」(self-deprecating pose [Piacentino, 167n]) を取っているようでありながら、含み笑いをして、自分をこれらの「偉人」に代わりうる存在であるとしていることからして、「偉人」の名前の列挙は、ジョーンズの資質・能力に対するジョーンズ自身の揶揄、というよりも、これら数多くの「偉人」によるアメリカの新しい意味づけ・位置づけの試みそのものが、さらに広がり延々と続く意味づけ・位置づけのいっそうの混乱状況を生み出していることに対する、ジョーンズそしてヘイルのバーレスクと解釈することができる。

旧南西部ユーモリストはそれぞれ支持する政党を持っていた。多くの旧南西部ユーモリストはホイッグ党支持者であったのに対して、ヘイルは民主党支持者であった。しかし、旧南西部ユーモリストは、少なくとも「ユーモリスト」としては決して一貫したホイッグ党支持者ではなかったのと同様に(廣瀬)、ジョーンズを通してうかがえるユーモリストのヘイルも徹底した民主党支持者では決してない。旧南西部ユーモリストにとってユーモアは、自分たち自身のそしてアメリカ全体の行方を探るものであることにおいては徹底していた。

ジョーンズはこのようなバーレスクを分かち合う他の旧南西部ユーモリストに敬意を表している。例えば、旧南西部ユーモアの発展に寄与したニューヨークの『時代精神』(*Spirit of the Times*) の編集者ウィリアム・ポーターに、プラケマイン近くの^{バイユー}湿地帯で捕まえた鰐を送ったので、鰐の表情や休憩する場所で判断できる「晴雨計」(*barometer*) として役立ててほしいという手紙を送付している(1842年8月17日 [123-26])。また、トマス・バングズ・ソープの蜂蜜猟師 (bee hunter) トム・オーエン (Tom Owen) ——「正真正銘の

蜂蜜猟師、漁師、農夫」(...a ra'al bony fidy beehunter, fisherman and farmer [150])——を称え、人の手を次々と渡って必ず幸運をもたらした「リスの尻尾」を送る旨の手紙(1843年5月29日付 [149-52])を送付している(ソープの“Tom Owen, the Bee-Hunter”については廣瀬 [269-70] を参照)。また、1844年3月18日付の手紙 [162-64] では、ウィリアム・タッパン・トンブソンの民兵軍少佐ジョセフ・ジョーンズ (Major Joseph Jones) は、実は仇敵のボストンの弁護士ビル・フォックス——「汚らわしいヒキガエル」(nasty toad [162])——が、厚かましくも自分 [ジョーンズ] の名前を騙って、「[ジョージア州の] 知事に一杯食わせてやろうと考えて (やつはこのゲームの達人なんだ、ビルってやつは [...he thought he'd come the Yankee over the Governur (he's great at that game, Bill is...)] [162-63]) (下線は廣瀬による)、案の定、功を奏して「少佐」になったと告発する——ヤンキーのだましのテクニクに注意を促す “to come the Yankee over” (=to humbug, to cheat) という口語表現を自由に操っていることからしても、ジョーンズがヤンキーと対等な南部人になっていることを自ら証明している (ジョーンズとジョーンズ少佐を巡るトンブソンの分析については、廣瀬 [199-202] を参照)——いわば「間相互テキスト」(intertextuality) の様式による旧南西部ユーモリスト間のダイアログを通して、新しいアメリカの意味づけ・位置づけの試みを提示していると言えるのである (旧南西部ユーモリスト間のダイアログによるアメリカのアイデンティティ探求の分析については廣瀬『アメリカ旧南西部ユーモア文学の世界』を参照)。

VII

ただ、ヘイルを他の旧南西部ユーモリストと比較して今一度整理すれば、大多数の旧南西部ユーモリストの拠点が「にわか景気」(flush times) の主舞台となったフロンティア・サウスに集中していたのに対して、ヘイルの場合は、フロンティア・サウスよりも地域が南へ外れて、メキシコ湾岸のニューオーリ

ンズと、そこからミシシッピ川沿いに百キロメートル余り北上したブラケメインが拠点となっている。また、ヘイルは北部出身（ロードアイランド州）であることから、ジョーンズと故郷マサチューセッツ州との密接な関係の描写を通して、マサチューセッツを中心とする北東部地域をルイジアナ南部地域と同じ比率の重要性を意識して拠点にしている。それらに加えて、メキシコ戦争が始まると直ちにメキシコにジョーンズを派遣する——ヘイルは国境を越えたところに拠点を設けた唯一の旧南西部ユーモリストである。つまり、ルイジアナ南部、マサチューセッツとメキシコという三つの拠点を設けてアメリカのマニフェスト・デスティニーの様相を多面的にとらえているのである。しかも、他のユーモリストは少なからず、領土が獲得されてアメリカのものとなった開拓地や開拓地と未開地との境界に形成されていく多文化社会の政治的、経済的、法律的、社会的、宗教的、人種的・民族的様相をとらえてマニフェスト・デスティニーの行方を模索したのに対して、ヘイルは、上で見たようにそれらの様相もとらえながら、とくに特徴的なこととして、領土拡張自体に絡む問題——メイン州とイギリス領カナダとの国境衝突、オレゴン・テリトリーを巡る問題、テキサス共和国併合、そしてメキシコ領土獲得など——を照射している。そしてもう一つ特徴的なこととして、ヘイルはウェストポイント陸軍士官学校に在籍していたことから（Jul. 1, 1836–Oct. 14, 1837）、領土拡張のまさに先陣となった「軍隊」が『ジョーンズの手紙』の重要な役割を担っている、ということである。しかも「軍隊」とは、ウェストポイント陸軍士官学校出身者で構成される「正規兵」（**regulars**）ではなく、一般大衆からなる「志願兵」（**volunteers**）あるいは民兵（**militia**）である。そしてヘイルは、このような二つの観点——国境問題と志願兵・民兵——についてもバーレスクの視座を崩すことはない。ゆえにマニフェスト・デスティニーの意味づけ・位置づけの不確かさや曖昧さに戸惑いながら暗中模索するアメリカ（人）の姿をさらに際立たせることになっている。

『ジョーンズの手紙』において「志願兵」の役割を与えられているのが、上でも言及したが、ジョーンズの故郷の町デッド・カウ・ブルックで、いとこの

サイモン・スポールディン[スポールディング]が隊長を務める「デッド・カウ・ブルック砲兵隊」(the Dead Cow Brook Artillery Company [108])である——ジョーンズは「湾岸州民兵軍」(Bay State Melishy [125])とも呼んでいる。実は、ジョーンズが1841年の夏に帰郷した際、上でも取り上げたように、6マイル離れた町のライフル民兵軍「クリングタウン・タッチ・ミ・ノッツ」との合同で「フロリダの沼地戦争」(すなわちセミノール戦争)を再現した「軍事訓練」[76-77]を行なったが、それを企画したのがジョーンズであり、その労に対して「連隊大佐」(Regimental Curnel [Colonel] [79])の称号を与えられ、以後、ルイジアナに戻っても「大佐」の称号は維持されることになる。もっとも、担当兵の砲術の未熟さが災いして藪に打ち込まれた大砲に刺激されたスズメバチに追われる^{スラップスティック・コメディ}ドタバタ喜劇でこの「戦争」が終わる。そしていわば「見せかけの戦争」(the sham-fight [79])になってしまったことに対してジョーンズは非難される。しかし「根回し」(Why, I *leckshuneered*—I canvassed the people! [79]——率直に「根回し」という言葉を用いず、ジョーンズは国会議員立候補者であることから、この「選挙運動—遊説をした」という表現を用いて含み笑いしながら遠まわしに言っている)——によって「一足飛びに普通の人間から大佐」になったというのである (...to jump, at one lick, clean from a common man up to a Curnel [79])。つまり自分の「大佐」の地位獲得の画策に対して自らバーレスクの視座を向けていることになる。(スズメバチ騒動の^{スラップスティック・コメディ}ドタバタ喜劇は旧南西部ユーモア文学でよく用いられる題材である。メキシコ戦争の「モントレイの戦い」[Battle of Monterrey]の第1日目[1846年9月21日<21-23日の3日間の戦い>]の戦況を『ピカユーン』を通じてザチャリー・テイラー将軍に報告するジョーンズの「公式文書」(Official Despatch [Dispatch] [201])では、敵を追跡していた一人がスズメバチに刺されて負傷したのみで、戦死者は出なかったとしている [I didn't have nobody killed in that action, and only one man wounded; that was stung with a yaller wasp's neest pursun' the innemy. <202>] これもメキシコ戦争のバーレスクとなっている)。

1841年12月23日付の手紙は、ルイジアナに戻ったジョーンズに、イギリス領カナダとメイン州との国境を巡る紛争にサイモンの民兵軍が「志願兵」(95)として参戦したことを伝える義妹ルースの手紙や部隊の機関紙的役割を担っている『愛国主義の塔—号外』(the *Watchtower of Patriotism Extra*)を、「仇敵のビル・フォックスが自分の学問をひけらかして女性を驚嘆させようとするときの言葉」[93]を使って言えば“*verbatim et literatim*” (ジョーンズのラテン語 [93])、すなわち「一字一句そのまま」(正しくは“*verbatim et literatum*”)引用したり、内容を要約している。それによれば、イギリス軍がメイン州全域を焼き討ちにし、いずれ「血に飢えた」(blood-thirsty [94])イギリス人がボストンそしてデッド・カウ・ブルックに進攻してくる恐れがあるため、サイモンの民兵軍が迎え撃つ準備を整えて待ち構えていたところ、複数の荷馬車がやってくる。荷馬車にマスカット銃を突きつけて停止を命じたものの、ボストンの市場に鶏肉を運んで戻ってきた農夫たちの荷馬車でしかななく、イギリスとも休戦協定も成立していて、イギリス軍は撤退したことが判明した、というのである。

この内容は、1839年春にメイン州とイギリス領カナダのニューブランズウィック (New Brunswick) での国境衝突を踏まえている。1783年のパリ条約で決められた国境線がなお曖昧だったために起こった「アローストク戦争」(Aroostook War) は、ウィンフィールド・スコット将軍 (General Winfield Scott)——メキシコ戦争ではヘイルの上官でもあった——による休戦の取りまとめによって無血解決し、1842年8月9日の条約締結 (Webster-Ashburton Treaty) で終結した、というものである。

メイン州は1820年にマサチューセッツ州から分離してできた州であり、元々はマサチューセッツの国境問題であったがゆえにマサチューセッツ州にとっても決して見過ごせなかったということ、またメイン州が一万人以上の志願兵・民兵を徴兵したといった歴史的事実を、ジョーンズの民兵軍は反映していると言える。ルースの手紙によれば、イギリス軍の進攻の脅威に対して「戒厳令」(marshall [=martial] law) が発令され、それによって「愛国者たち」

(*Patryuts [=Patriots]*) が立ち上がった [94]。そして「血管に流れている'76年の血をかき立てた (*you've stirred up the blood of '76 in our old veins*) [94]」というのである。また『愛国主義の塔—号外』によれば、「デッド・カウ・ブルックの軍隊」も「最も輝かしき『戦争の大波』 (*coop der mare de garrs* [ジョーンズのフランス語。正しくは *coup de mer de la guerre*]) の中の志願兵 (*volunteer*) として携わるのは幸運だった」 [95]。そして「恐ろしいニュースがわれわれの勇敢にして愛国的な町の住民の胸の中に (*in the bussums of our brave and patriotic town's people*)、人間の魂を試す眠っていた精神 (*dormant sperit that tried men's soles*) を呼び覚ました」 [95] のであり、「勇猛果敢にして愛国的なスポールディン隊長 (*the brave and unflinchin and patriotic Capting Spaldin*) がデッド・カウ・ブルックの気高き自由の息子たち (*the noble sons of liberty*) を招集して勇敢に戦争へと導いた」 [95] というのである——“*sperit that tried men's soles*” とは、『コモン・センス』 (*Common Sense*, 1776) と題したパンフレットによって植民地民にイギリスからの独立を促したトマス・ペイン (*Thomas Paine*) の、「危機 [第1号]」 (“*The Crisis*” No. 1 [Dec. 23, 1776]) の冒頭の言葉 “*THESE are the times that try men's souls*” [Paine, 290] を踏まえていると思われる。

サイモンの部隊が独立革命時の精神を受け継いでいるのを自負していることを証明してみせる以上の多くの表現は、1840年代の領土拡張に刺激されたマニフェスト・デスティニーの表象としての志願兵が急増した事情を裏書きしている。メキシコ戦争におけるマニフェスト・デスティニーの表象としての志願兵の位置づけを行なうロバート・W・ジョウハンセン (*Robert W. Johannsen*) の次のような定義は、それまでの歴史における志願兵にも当てはまる：

In every section of the country, the volunteers became the object of adulation as communities vied with one another in their show of support to the country's cause [26]...American perceived their volunteers as they perceived themselves :

simple, unpretentious, impatient with authority, individualistic, and disdainful of class distinction. The lack of military appearance and demeanor, informal dress and undisciplined manner, surprising to Mexicans and shocking to the army's regular officers, far from being a source of embarrassment, became a matter of pride for they simply confirmed the absence of a military tradition in the United States [30]...Patriotism and Providence were closely linked in the 19th-century mind by the belief that the United States was God's favored nation, its inhabitants God's favored people. Because God had willed America's progress, its progress was foreordained. America saw God's agency in virtually everything that took place [49]...The patriotism [Walt] Whitman admired in the common people was reflected in those who were fighting Mexico. Many of the soldiers were convinced that they were instruments of an overruling Providence. "God had a work...to be accomplished," wrote one volunteer, and the war was His plan for achieving it [Johannsen, 51].

しかし、サイモンの愛国的決意や言葉と戦闘の様子や結果とのギャップを透かして見せるジョーンズとヘイルのバーレスク調のユーモアをどのように解釈すればよいのだろうか—アールストック戦争が無血に終わったことに対して、「途方もない国際的ジョーク」(a huge international joke) と見なされ、「選挙演説でのからかいや笑いの種」(the subject for jest and laughter on the stump) とされ、「新聞記者のグロテスクなウィットのための豊富な話題を提供するもの」(a fertile field for the grotesque wit of newspaper writers) となった (Sprague [65])、というような意味合いはない。またジャック・ダウニングがマダワスカに赴いたときには解決しており、武勲を立てることができずに失望している姿をとらえて、ダウニングにはふさわしくない身の丈以上の英雄志向を揶揄するシーバ・スミスの視座を採用することもできない。ジョーンズそしてヘイルにおけるバーレスクは、志願兵が表象するマニフェスト・デスティニーを明確にとらえることができずに戸惑うアメリカ人の姿を見透かし

ている、という解釈が成り立つのである。

さらに、アルーストク戦争の時と場にタイムスリップして近づいてみれば、ジョーンズそしてヘイルのパーレスクには、1783年の平和条約 (the Paris Peace Treaty) にまでさかのぼらせて、条約の曖昧性——例えば境界を規定するうえで使われた「高地」(Highlands) という言葉について英米間で解釈が異なっていたことなど (Sprague [20-23])——が衝突の原因となったという解釈も思い浮かんでくる。1842年のウェブスター=アッシュバートン条約 (Webster-Ashburton Treaty) に至るまでに、1812年戦争を終結させた1814年12月24日の [ベルギーのヘントで締結された] ヘント条約 (Treaty of Ghent [1815年2月11日に上院が批准]) でも、1783年の条約の意味が改めて検討されたということも、国境の規定が曖昧であるという認識がたえずあったことを裏づけることにもなる。このような条約問題をさらに拡げて考えてみれば、1783年のパリ条約締結からアルーストク戦争の時代まで何度も繰り返して書き直され締結され直された「文明化五部族」(Five Civilized Tribes—the Cherokees, the Choctaws, the Chickasaws, the Creeks, the Seminoles) の先住民との「条約」の曖昧性——状況変化で曖昧性が生じた場合には、あくまでもアメリカ白人による土地略奪行為が有利になるように書き直されたのであった——に対する揶揄をも、同時代を生きたジョーンズそしてヘイルのパーレスクが含意している、という解釈も的外れにはならないとも思えてくる (ちなみに、ジョーンズがよく言及するセミノール部族が1783年から1840年代の間に結んだ条約は4つ [1823; 1832; 1833; 1845] であり、チェロキー部族の場合は18に上る)。さらにまた、ジョーンズのルイジアナ行きの所期目的はフランス語の勉強であり、手紙にはフランス語を多く散りばめていることを考えてみれば、実は、アルーストク地域やマダワスカ地域に住んでいたフランス語の民アカディア人 (Acadians) やブラヨン人 (Brayons) が英米の争いの間でまったく無視されて彼らの土地が頭越しに剥奪される結果となったのであり、ジョーンズあるいはヘイルの意識の中にこれらフランス語の民の存在がまったく浮かばなかったとは言い切れない。

もう一つ、志願兵の活躍を挙げるならば、サイモンのデッド・カウ・ブルック砲兵部隊のロードアイランド州遠征がある。サイモンからの手紙で、ロードアイランド州が「自らに対して宣戦布告した... 彼らが自殺するつもりなのか、合衆国にそむくつもりなのかわからない」(Rhode Island had declared war agin herself... it was unsartin whether or no they was a goin to commit suicide, or turn agin Union) ということを受けて、ロードアイランド州民が「デッド・カウ・ブルック砲兵部隊によって捕虜にされる前に、自重勸告を行なうために」80名の兵士を率いて赴いたことを知らされる [108-09]。しかしその行軍途中で真つ暗闇となり雨が降り出したために鉄橋で雨宿りしていたところ、「敵」[the innemy] すなわち「機関車」(the railroad) が近づいてきた [109]——慌てふためいて大砲も剣も毛布も馬も見捨てて必死に逃げる。停車場まで逃げ延びても次から次へと体ごと「レンガの柱に正面衝突する」(run smack agen a brick piller [110])。翌朝、意志消沈した部隊は三々五々故郷へ戻っていくのであるが、サイモンによれば、「もしアメリカ政府全体が自殺したいのであれば、おそらくこれが自分たちの最後の戦争になるだろう、と[サイモンの兵士たちは] 心を決めた。ジョン・ブル以外の何ものも彼らを再奮起させることはないだろう」というのであり、サイモン自身も「外国との戦いが近々にはないと思ったら辞める」[110] と語って手紙を締めくくっている。

以上のロードアイランドでの出来事は、1841年に当地で起こった「ドアの反乱」(Dorr's Rebellion) を踏まえている。当時、1663年のチャールズ二世英国王 (King Charles II) の特許状 (royal charter) をなおも州憲法としていたロードアイランドの投票制限規定——少なくとも134ドルの価値のある自由地を所有している者で、しかも長男のみが選挙権を有する——に対して、ハーヴァード大学卒の弁護士であり州議会議員であったトマス・W・ドア (Thomas W. Dorr) が10月、すべての成年男子に選挙権を与える州憲法を起草し、圧倒的多数で支持を得、また翌年4月には知事に選出されたのであるが、なお政権を維持していた知事サミュエル・W・キング (Samuel W. King) が戒厳令を発令し、ジョン・タイラー大統領の援助を得て民兵を派遣して反乱の

鎮圧に当たった。ドアは1843年に反逆罪で終身禁固刑を言い渡されたが、1年後に釈放され、まもなく新しい選挙制度も新憲法の下で認められた、というものである。

話の流れからサイモンの部隊はキングとタイラーの下で行動した民兵軍に所属したととれる—ジョーンズが「われわれの高名にして歴戦の兵つわものの同郷町民」(111)と尊敬するポッター大尉のドア評は「とてつもなく感情の激しい男」(Dorr is a darned fiery feller [115])であり、ドアがニューヨークで「フロリダでインディアンを殺した剣」(114 [セミノール戦争への言及と思われる])を入手していて、「やつがああ恐ろしいインディアンの剣 (that 'tarnal Injun sword) を所持している限り近づきたくない」[115]と述べている。しかもその剣に強い恐怖感に襲われた部隊の一人が一時「脱走兵」(the deserter [115])になった、というのである。

しかし、ポッター大尉によれば、部隊がここへやってきたのは「治安を維持するためであり、どちら側かにつくためではない。つまり中立の立場 (a neutral course) をとった」[114]というのである。現地住民から「どちら側と戦うつもりだ——合法側 (*legals*) か、それとも違法側 (*illegals*) か」と質問を突きつけられたサイモン隊長が、「われわれはわれわれ自身の判断にしたがって戦うということだ。つまり両方の側と戦って流血を避けるためにやってきた」(We meant to fight on our own hook ; that we'd come to fight *both* sides and prevent bloodshed [112])と返答する (イタリックは原文のまま)。

また、『愛国主義の塔』は、「デッド・カウ・ブルック砲兵部隊 [Dead Cow Brook Artillery Corpse——ここでも“Corps”ではなく“Corpse”〈死骸〉としている]の勇敢にして勇壮な心いにしえは古の不死鳥のごとく、決して滅ばされないのだ! (...they can't be annihilated! [111] イタリックは原文のまま)」と称賛する。「平和を維持し、どちら側にもつかないようにするために愛国的情熱でもって努力した (laboring with patriotic zeal to keep the peace and never commit themselves on nary side [下線は廣瀬による])... 彼らの輝か

しい偉業を締めくくることになった結末は、これから生まれてくる世代 (still-born generations [下線は廣瀬による]) に伝えられるべきであり、また彼らの祖先の愛国者たちの紋章入りの盾に刻まれるべきである、というほどの驚くべき出来事で際立っていた」[121] とする。

ロードアイランドの住民の詰問——どちら側と戦うつもりか——に対するサイモンの返答——両方の側と戦う——に、住民は「どっと笑い出し」(The people begin to laugh and hoop [=whoop])、「その古い穴だらけの大砲を波止場へ投げ込め」(throwin the old honey-combed cannon into the dock) と騒ぎ立てる [112]。群衆を遮り、笛と太鼓を演奏する二人の兵士を先頭にして通りの羊の群れを散らかしながら進むものの、案の定、大砲を引っ張る紐の1本が最も険しい場所の頂上で切れ、鼓笛係や複数の見物人にもぶち当たりながら転がって行って、「禁酒の宿」(temperance tavern)⁴⁾のドアにぶち当たり、陶器(chany [=china])を机上いっばいに置いた屋内のテーブルを破壊した、というのである [112]。

風車を巨人と思いつんで突進して跳ね飛ばされるドン・キホーテの姿をも連想させる機関車騒動の顛末や大砲が引き起こすスラップスティック・コメディドタバタ喜劇と、部隊の武勳を称える『愛国主義の塔』の記事内容とのギャップからして、バーレスクのトーンが強まっている。“still-born generations”という表現も、「これから生まれてくる世代」、つまり“generation to come”の意味で“generation to be born”とすべきところ、文字通りにとって「死産した世代」つまり「生まれ

4) 「禁酒の宿」(temperance tavern) とは、禁酒主義 (temperance) 運動の一環として生まれた「酒を出さない宿屋」のこと。マーク・トウェインの『トム・ソーヤーの冒険』(*The Adventures of Tom Sawyer* [1876]) で、「禁酒の宿」の主人が酒を隠していたことが発覚したことをとらえて「非常に重大なこと」(tremendous as the fact was) とし、違反は「営業停止」(the place has been shut up) になったとしている。禁酒主義やその運動を主導する宗教や社会の過剰な厳格主義や形式主義に対するトウェインの皮肉が込められている (Twain, *Tom Sawyer*, 185)。ジョーンズの場合も、大砲が壊した机に載せた「陶器」には、おそらく酒類が入っていたととれることから、トウィエンと同じく、禁酒主義やその運動に対するジョーンズそしてヘイルの皮肉が込められていると読める。

てこなかった世代」となっている。語法上の誤植とするよりも、パーレスクを意図した使用ととらえることができる。

ジョーンズによる『愛国主義の塔』からの抜粋引用によれば、部隊は帰還途中に出くわした紡績工場の女工たちに「工場を取るか、自分たちを捕虜にするかを30分以内に決めるように」と迫られ、「捕虜」として連れ帰る。「女支配」(a petticoat form of government [122])を恐れるものの、兵士との結婚などによって「市民権が与えられる」(...prisoners shall be *nattered* [= *naturalized* <122>])といったことを決議した、というのである。さらにパーレスク調の後日談は続き、負傷して帰還を延ばしたポッター大尉は、「傷の手当を施してくれたある年増さの女の手に落ちて」(...fell into the hands of a sartin old maid that nussed him [130])結婚する——もともと1842年11月7日付の手紙の中でジョーンズはポッター大尉を60歳ぐらいとしていることからして [135]、似合いの年齢好と思われる。しかしほどなくして、部隊の兵士仲間の一人が妻に対して親しげにしすぎると嫉妬したポッター大尉は決闘を申し出るものの、相手も含めて部隊全員がポッター大尉を諷める目的で仕組んだ決闘で相手を殺したと思ひ込み、妻も捨てて、ジョーンズのいるルイジアナへ逃亡し、その後6年間ジョーンズと共に暮らして、「自分の考えもすっかり土地に染まった」(...my principles has become *acclimated* [215])と、ジョーンズ同様、心身共に完全に南部人となっていることを告白している——このとき(1848年)、ポッター大尉は「自分は68歳の時から南部の土地で暮らしている」[215]と語っていることからすれば、ジョーンズによるポッター大尉の年齢情報とはかなり違ってくるが、いずれにしろ、「天井を向いた赤鼻」、「うっとりとした黒目」「相当な大口」といった顔つき [135] で、柔軟性や冷静な判断力を欠き、またいわゆる女好きの性格ではあるが、それ以上に誠実にして一本気な性格で正義感に燃えた人間であることから、ポッター大尉はジョーンズの大切な友人であることに代わりはない。

1842年12月19日付の手紙や1843年6月14日付の手紙において、ジョーンズが、「旗幟を鮮明にしないような人間では決してない」という言葉とは裏腹に、

自身のきわめて曖昧な態度表明をあくまでも承知の上でわざと垣間見せていたように、ここにおいては志願兵部隊の態度を曖昧に提示している——少なくともサイモン隊長やポッター大尉は真剣だと思っているのであるが、ジョーンズは彼らを見下げる住民の視線を見て取っていることからして、真剣な部隊の戦闘表明の曖昧さを仄めかすジョーンズの同情・憐憫の情が入り混じったバーレスクの視座が垣間見える。そしてそれはサイモンの部隊を超えて、とくにドア派・キング派の側に参戦した志願兵部隊の態度にも曖昧さが付きまとっていたことをとらえているとすることができる——そもそも「志願兵」を構成するメンバーは、とくに1828年の110万票もの一般投票数が影響したジャクソン大統領当選以来、ますます拡大する白人男子普通選挙の主役を演ずる民衆が中心であり、サイモンの言葉どおり「自分の判断にしたがって戦う」(to fight on our own hook [112]) 個人的な自由・平等精神を満喫したのであるが、その精神は同時に国を守る愛国心とも表裏一体となっていた。テイラーそしてキング派の側に付いて戦った志願兵部隊が、ロードアイランド州そして国全体の安寧秩序を守る愛郷心・愛国心にかき立てられたとするならば、他ならぬ白人男子普通選挙の恩恵に浴した志願兵の心の奥で、個人的自由・平等精神の発揚として志願兵に加わったことに対して、自己矛盾のようなものを感じてはいなかった、と言い切ることはできるだろうか。部隊の曖昧な態度に対して距離を置いて見据えるジョーンズのバーレスクは、そのような自己矛盾を見透かしていると考えてみることもできる。そしてそれはまた、ドア派・キング派のどちら側に対しても、選挙権の問題をどの程度明確に認識したうえでの行動であったかの探りを入れる視座の必要性をも意識させるものとしても作用するのである。

ドアの選挙権拡大闘争の背後には、少数の土地所有者を中心とする地方の農業社会から都市の誕生・拡大をもたらす産業革命への大転換や、移民の増加など、素早い勢いで変貌し流動する情勢・状況があったことからすれば、そのような情勢・状況は何もロードアイランドに限られるものではなく、アメリカ全域に展開されるものであった。二派の対立と思われるものであっても、常に政治的・経済的事象が絡んで、幾重もの対立図式が出来上がって、どちら側に属

することになるのか、常に自問を強いられ、いったん決めた立場であっても、知らぬ間に不本意ながら別の立場に立っている自分に気づかされることも少なくなかったのであり、アメリカ人を絶え間なく混乱し混沌とした不安定な状況に陥らせていた——ジョーンズそしてヘイルのパーレスクはそのようなアメリカ人の姿を大写しにしていると言えるのである。

白人男子の普通選挙権拡大というかたちでの「民衆の自由・平等」の主張が、アメリカ独立革命・建国期以来、高らかに掲げられた民主主義の根幹をなすものであったものの、それを果たすべく声を上げたドア派を「反乱」(rebellion)ととらえるキング派やテイラー大統領の論理はどういうものであったのであろうか——一つ考えられるのは、そのような「反乱」を、まさに白人男子普通選挙による自由・平等を謳歌して生まれた他ならぬ志願兵・民兵の力を借りて鎮圧したことによって、「州や国家の安寧秩序」が保たれ、民主主義が正しく機能している、ということを見事に証明してみせた、というものである。しかしそのような論理は、結局、自分たちの論理を正当化し相手の論理を覆すために、あとで作り上げることのできる論理——というよりも理屈——という意味合いがあり、最初からあったドア派の民主主義の主張に対してキング・大統領派の民主的な論理を戦わせることができなかった以上、やはりキング・大統領派においても、独立革命・建国期以来ずっと抱えていた民主主義の理念の曖昧さを解決することにはなっていない。「ドアの反乱」はむしろ、民主主義の本質的な曖昧性をいっそう露呈させることにしかならない出来事であったととらえることができる。それは、民主主義とは勝ち取ったイデオロギーでもなく、具体的な政策でもない。その意味が曖昧なものであるだけに、自分のよって立つ場が不安定であると感じるそれぞれのアメリカ人が、それぞれのイメージに合わせて自己解釈を試み、安定を図るための「レトリック」であった、ということはいっそう際立たせることになったと言える。

この論点を補強するために歴史をさかのぼってみれば、まったく同様のケースが、1794年(Jul.-Nov.)にアレゲニ山脈を越えたペンシルヴァニア州西部のピッツバーグ(Pittsburgh, Pennsylvania)に起こった「ウイスキー反乱」

(Whiskey Rebellion) にも見られる。ジョージ・ワシントン大統領とアレクサンダー・ハミルトン (Alexander Hamilton) 財務長官による物品税 (excise tax) が、ペンシルヴァニア西部の農民が作るウイスキーにもかかることに反対して、数百人の農民が収税吏を襲い、監査役の家を焼き討ちにした。それに対してワシントン大統領が1万3千人近くの民兵軍——正規軍に対して、1792年制定の「民兵法」(Militia Act) によって、18歳から45歳までの白人男性市民に兵籍登録を義務づけ、有事の際に州知事によって招集をかけられた軍隊組織——で鎮圧に赴いたが、農民が引き下がることによって軍事衝突は避けられ終結した。ワシントン大統領はこの「反乱」を『民主社会の最初の熟した果実』(the first ripe fruit of the democratic societies) ととらえ、それは「秩序の味方と、自由の味方と名乗る人間との衝突」であるが、「自由の味方」を名乗る人間は『人間的な政府と幸福の最上の組織を破壊しようとする極悪非道な企みを密かに抱いている人間』としていた (Slaughter, 194 [二重括弧内がワシントン大統領の言葉の引用])。

この「ウイスキー反乱」における民主主義の曖昧性をバーレスクの枠組みでとらえているのがヒュー・ヘンリー・ブラッケンリッジ (Hugh Henry Brackenridge) である。ブラッケンリッジは、農民の暴動の真っ只中で、農民の立場を代弁して解決に全身全霊を注ぎ込んだ。しかし、解決への唯一の道は大統領による「恩赦」(amnesty [Brackenridge, 141, 152]) しかないとする彼の主張は、独立革命の「自由の息子」に自らを重ね合わせる農民 [Slaughter, 163] の大義名分を汚したと農民から非難され、結局彼は、農民、政府双方から誤解を受ける。そこで双方から距離を置き、双方の間で微妙な平衡感覚を維持しようとする苦悩に耐えながら、ピッツバーグの要塞を占拠できるかどうかという農民の不安に対して、次のように答える——「きっとできる... 犠牲者は千人以上は殺されないし、五百人以上傷つくことはない」 [Brackenridge, 107] と。また政府からの誤解については、「私が暴動の首謀者だと言われているということを知り、大いにそう見られるように、それらしく振舞おうと努めなければならないと思った」 [Brackenridge, 195] と述懐

する。両者の民主主義のためにという大義名分の背後で、その本質が両義的な矛盾・曖昧さを宿していたゆえに、それぞれの立場の者が自分たちのレトリックを使って、それを自家籠中のものにしようと、相手に対して攻撃的な姿勢をむき出しにしながらも、同時に内部では、その意味を必死で自分に問いかけて模索していた——そのような双方の人間の不安を逆撫でするバーレスクが作用しているのである（以上のブラッケンリッジの「ウイスキー反乱」の分析は、拙稿「Hugh Henry Brackenridgeにおける民主主義の両義的矛盾をめぐって」を踏まえている）。

この「ウイスキー反乱」より8年前に起こった、マサチューセッツ西部の農民による「シェイズの反乱」(Shays' Rebellion [Aug. 1786-Feb. 1787])——独立戦争後の不況ゆえに、負債に苦しむ農民たちが、元軍人ダニエル・シェイズ (Daniel Shays) を指導者として起こした——とも併せて、これらの「反乱」の出来事においては、自由・平等精神に支えられた民主主義を訴える側も、民衆の行動を「反乱」としてとらえ、それを抑えることによって州や国の安寧秩序を保とうとする側も、どちら側も「民主主義」の自己主張であるととらえたのであるが、ブラッケンリッジのバーレスクと同様にヘイルのバーレスクも、それを「民主主義」の本質的な曖昧性ととらえて、その意味づけに奔走するアメリカ(人)の状況を浮き彫りにしている、とすることができるのである。

アルーストク戦争のようなアメリカ東北部におけるカナダとの国境問題と同様並行してアメリカ北西部にはイギリスとのオレゴン国境問題があった。この問題はイギリスのみならずスペインやロシアとの関係の問題でもあったが、次第に英米間の問題に集約され、共同所有の時期を経て、1844年には、大統領に選ばれたジェームズ・K・ポーク (James K. Polk) によるアメリカのみの領有権の主張によって、両国の緊張がいつそう高まった。ジョーンズは1843年3月15日付の手紙の中で、2月5日と11日に出現した巨大彗星を戦争の予兆ととらえる。なぜならば過去にも「インディアン戦争、独立戦争そしてこの前の戦争が起こる前に」(afore the Ingin, Revolutionary and last war [=French

and Indian War <1755-63>, the Revolutionary War <1775-83> and the War of 1812 <1812-15>]) [145] 彗星が現れたという話を紹介して、今回はこのオレゴン・テリトリーを巡って「イギリスとの関係が難しくなると思う」(I'm afeerd we'll have diffikilty with the English about that territory... [145]) としている。つまりマニフェスト・デスティニーによって自然と沸き立つ純粹な自由・平等精神の発揚とはまったく裏腹に、その精神を声高に謳歌するポーズを巧みに示しての政治的駆け引きの現実があったのである。ただ、この彗星は何か悪いことが起こる予兆であると見なすアメリカ人の恐怖・不安を多くのユーモリストが皮肉っているのと同様に、ジョーンズも彗星の出現と世界の終わりを予言するミラーの説とを並べて取り上げて両方を皮肉ることになっているパーレスクは、マニフェスト・デスティニーの否定というよりも、元からそのような神の意図が働いているかどうかの自問をたえず強いられていたアメリカ人の不安を心の奥に押さえ込みたいがために、マニフェスト・デスティニーをいっそう声高に唱えた、という心理的葛藤を透かせて見せることにもなっている。

また、テキサス共和国併合 (annexation) についてのジョーンズの考えを「デッド・カウ・ブルックの高名な友人たち数名 (some of my distinguished frinds)」[165] から求められたことに対して、ジョーンズは1844年6月4日付の手紙で回答している [以下、166-67]。

まず次のような条件付き (conditionally) であるならば、テキサスを受け入れるべきであるとしている——1. もしテキサスがわれわれに加わりたのであるならば、2. もしテキサスが南部を強化して (strengthen)、合衆国全体を強化することに繋がるのであるならば、3. もしテキサスが肥沃な土地を持っていて、砂糖や綿花、そのほかそのようなものをすべて栽培でき、我が国の富が増えるのであるならば、4. もしイギリスがテキサスの黒人を排除し (abolish the niggers)、続いて南部の黒人をも排除して、さらに輝かしい合衆国を排除したいのであるならば——というのである。

そして、北部が太平洋岸まで拡張したいというのであれば、南部とて同じである。北部が黒人の排除を訴えるならば、南部も黒人を排除されないように訴える。しかしそれは北部の望んでいることでないのであれば、南部とて北部と同じ理由で、ただ南部の発展を願っているだけなのである。実際、ケンタッキーやヴァージニアやメリーランドでは黒人を排除したいという人たちも出てきている。マサチューセッツ州でも黒人と白人があまりにも多くなったので、もう黒人は要らないだろう。南部でも、もしこれ以上土地を手に入れることができないのならば、もう黒人は要らない。なぜならば、南部の黒人はすごい勢いで増えていて (breeds desput fast)、狭くなった場所に黒人ばかりになれば、悪臭を消すために相当量のさらし粉 (a good deel of clorrid of lime [=chloride of lime]) が要るし、さらし粉のための出費は国にとっては負担できないほどのものになるだろう。北部の人たちが南部の人間を愛していることは [ジョーンズは] よくわかっている。北部と南部は互いに愛し合っていて、しかも対等であることから、豊かさに格差ができると嫉妬心や敵愾心が生まれることを恐れる。北部がオレゴンを手に入れたがっているのは無理もないし、南部もできるだけそれを支援しているのは北部もよくわかっているだろう。

サンタ・アナ [将軍] (Santy Anny [=Santa Anna]) とメキシコについては、彼らの感情を傷つけないが、しかし彼らは道理をわきまえないといけない (reasonable)。彼らにこれ以上テキサスを痛めつけさせたくない。テキサス共和国民は自由で賢明なアメリカ人であるから、メキシコ人になることはできない。テキサスを捨てて貧乏人になって合衆国に戻ってくることはできない。それをするくらいなら死んでしまうだろう。彼らはそのうちこの栄えある合衆国の一員を構成することになるだろう。こういうことから、即座の併合 (immediate annexation) に賛成する、というのである。そして、そのことについて百もの理由を挙げることができるが、以上述べたことで、「ボルティモア党員集会」 (Baltimore Convention) に出席する前に、「テキサス問題には条件付きでのみ賛成である」ことをデッド・カウ・ブルックの友人たちにもわかってもらえるだろう、ということで手紙を締めくくる [以上、166

-67]——「ボルティモア党員集会」というのは、1844年5月27日にボルティモアで開催された大統領候補指名のための民主党党員集会のことである。この集会においてテキサス併合を唱えるジェイムズ・ポークが選出され、後に第11代大統領（Mar. 4, 1845-Mar. 4, 1849）に就任することになる。

この手紙で、上に要約したようなイギリスへの言及に続けて、「蜘蛛はたいてい暗闇の中で作業するが、イギリスも同じである」と言い、「イギリスがテキサスに蜘蛛の巣を張り巡らすようなことをさせてはいけない」[166] としているが、これは次のような事情を物語っている——イギリスは、テキサス共和国とメキシコに和平調停をもちかけて、国境をリオグランデ川（the Rio Grande）よりも北方にあるニューエイシス川（the Nueces）とする条件で、テキサスの独立をメキシコに承認させ、それによってイギリスは二つの川の間の土地を土地探検やカリフォルニア入植への足掛りにとしようとした。こういったことからイギリスは合衆国のテキサス併合に反対した、というのである [Piacentino, 168n]

ジョーンズの手紙は、領土拡張は神に約束された確かなものではなく、国家、民族・人種、地域の利害などが複雑に絡んでいる駆け引きという、人間の欲望・権力志向の行為以外の何ものでもないことを浮き彫りにしている。アメリカはなお、神にすぎることとはできず、あくまでも自分たち自身の力で自分たちの居場所を求めて暗中模索を繰り返さなければならなかったのである。

この論点を補強するために、さかのぼって1842年4月12日の手紙を見てみよう——その中でジョーンズは、「いったいわれわれは何に対して戦おうとしているのか、答えを見つけようとしてきて、半分死んだように呆然としている。イギリスに対してだという人もいれば、メキシコが相手だという人もいるし、インディアンに対してだという人もいる」と思い巡らせる。しかしそれに続く文面は、我に返ったかのように「自分にとっては奇妙なことではない。正当な理由の下に戦っているのだ。決意のよりどころとなるのは、われわれは**だれか**と戦わなければならないことだ。そうでないのなら、もうあきらめて、そのことについてはそれ以上何も言わないことだ」としている [以上、105-06]——

しかし、「半分死んだように呆然としている」という表白から「**だれか**と戦わなければならない」という決意表明に手紙のトーンが変わったのは、我に返って思い直した、というよりも「**だれか**と戦わなければならない」ことでしか自分たちの居場所を確保しアイデンティティを確認できないというのであれば、必死に「だれか」戦いの相手を探し求めなければならないアメリカ人の胸の内を吐露しているととれる——ジョーンズそしてヘイルのバーレスクは、マニフェスト・デステイニーを声高らかに謳歌しながら、同時にその意味づけ・位置づけを模索しているアメリカ（人）の胸の内を見透かしているのである。

そして実は、このような感想に続けてジョーンズは次のようなことをしたためている。

One thing is sartin, ither we must come out and slap old John Bull's jaws for him, or else let him du jest about as he pleases, for the sake of keeping out of a fuss, but I'm for slapping his jaws, and then takin the consequences. We've licked him twice, and got the best of the bargain when we made up friends, and we can du it agin, and ought tu come right out, tu once, and push him off, and give him a kick, afore he gits us into such a snarl that we shant know which way to turn. Every body knows that England is bitin at us, in every pint of the compass. She is tryin tu make other nations hate us. She is tryin to steal our territories and niggers. She is tryin to drive our ships from Afriky, and everywhere's else where we can make money. She is foolin with Santy Anny, to make him get into a scrape with us, so'st to git a chance tu help him out, and git holt of Mexico and Texas. She is pushing on the abberlishunists and niggers and Injuns agin the South. She is tetchin up the Yankees down in Maine, so'st to make 'em rantankerous in the pint. She's got nigger soldiers up to the Kennedy frontiers. She's kivered the oshun on our sea coasts with her shippin of war. She is sendin steam *packet* ships into our unsuspecting harbors, that is loaded or *ballasted* with guns and ammernishun, and

commanded by naval officers. She had done and is duin all this, and a good deal more, and yet she says she han't the last idea of quarrelin with us. [106]

つまり、ジョーンズは戦いの相手はイギリスであることを確認することによって、アメリカの位置づけを行なおうとしているのである。そして「今こそわれわれはジョン・ブル [すなわちイギリス] をやっつける時である」(**Now is the time for us to lick John Bull** [108]) と結論づける。

実は、上のようなイギリスがアメリカに対して行なったことの列挙から、『独立宣言』において、イギリス国王によってアメリカ臣民に対して「繰り返されてきた権利の侵害と篡奪の歴史」を「証明するために」26項目ほどの「事実」の列挙がなされていることが思い起こされる (“**The Declaration of Independence,**” ed. Heffner, 15-19)。そして『独立宣言』というものは、必ずしも独立したことを宣言する、というよりも、なおも独立することに踏み切れない人が大勢いたという状況をとらえて、独立の必要性を説いて意思統一をはかって団結することによって戦争に向かわせるという意図があった、という解釈も成り立つ [斉藤, 94-117]——この解釈を敷衍すれば、『独立宣言』前文で声高らかに宣言される自由・平等の権利も、その意味を明確に把握したうえでのもの、というよりも、以後、意味づけという作業を繰り返さなければならないという認識を前提としていたとも言える。

ジョーンズによるイギリスの行為列挙も、建国以来の大転換時代を迎えて再び白紙状態となったアメリカにおいて、新しいアメリカの位置づけ・意味づけを行なうための試行錯誤を試みる決意を反映した、いわばジョーンズそしてヘイル版の『独立宣言』という意味合いを帯びてくる。ただ、ジョーンズのパーレスクであることから、このジョーンズ版『独立宣言』の「イギリス」(England) という主語をアメリカに置き換えれば、同じようなことを、アメリカ先住民やアフリカ系アメリカ人に対してアメリカも行なっているのではないか、という意味合いをも背後に含ませている、という読み方もできるのではないかと思えてくる——実際、1845年9月4日付の手紙から最後の1848年3月

20日付の手紙におけるメキシコ戦争についてしたためる手紙に、そのような読みを可能とするバーレスク調のトーンが響いているのである。

VIII

1845年9月4日付の手紙でジョーンズはメキシコへ行くことを報告している。故郷の「志願兵部隊本部」(Head Quarters of the Volunteer Corpse [= Corps] [175]) から、「デッド・カウ・ブルック」の砲兵部隊と「クリングタウン・タッチ・ミ・ノッツ」のライフル部隊が志願兵合同部隊を結成してメキシコ戦争に向かうので、ルイジアナ州プラケメインで到着を待つように、という連絡を受けた。しかもジョーンズが大佐となって (You're our Curnel [175]; Curnel Pardon Joneses' regiment of independent volunteers [193]) 部隊をまとめ、サイモンはジョーンズに大佐の位を譲って、少佐そして後に中佐としての任務を引き受け、またポッター大尉は「副官」(adycong [=adjutant, 201]) としてジョーンズを補佐しながら、「食糧や酒類を管理するために」(tu take keer of the vittles and licker [176]) 同行する、というものであった。しかも「プラケメイン・ヴィレッジ軍」(Pluckumin [=Plaquemine] Village Army [176])——すなわちヘイルが隊長を務めていた民兵隊——も行きかかったら「軍旗を掲げてよい」(they may kerry the cullers [176]) といった提案もしている。しかし以降、メキシコ戦争の描写は最初から最後まで、この志願兵部隊のバーレスク調の描写に終始している。

部隊がプラケメインに到着するまでに、「兵士たちが今にも捕虜になったり、脱走したり、溺れ死ぬ状態を味わっていた」(...the sogers has near about all ithier been taken pris'ners, or desarted, or got drowned [177])。また「戦争では略奪行為 [forage] が認められている」という、将校の一人として加わっているミラー牧師 (Parson Miller) の意見を取り入れて、50人もの兵士が部隊を離れたが、戻ってきたのは三人だけになっていた [177]。そして兵士が日々脱落していき、ミシシッピ川下流に辿り着くまでに残っていたのは10人

だけだった [178]。サンチャゴ (Santayago [=Santiago de Querétaro]) を経て、リオグランデ川河口のポイント・イザベル (Point Izzybel [=Point Isabel]) に築かれた。「ポーク砦」(Fort Polk) に到着した時には20人の将校のみで、兵士は一人も残っていなかった。ポーク砦に到着する前に10人の兵卒 (private [188]) を採用するものの、やがて三人になって、しかも足手まといにもなり [192]、まもなく全員離脱してしまう [206]。残った20人の将校で鼓笛隊の任務も兼ねながら、マタモロス (Mattymorus [=Matamoros])、サンファン川 (the San Juan River) 沿いの町カマルゴ (Camargo)、モンテレー (Monterrey)、ベラクルス (Veracruz) のハラパ (Jalapa) へと向かう——メキシコ征服の達成に近づくとつれて、ジョーンズの志願兵部隊が自壊していくのである。

1846年7月6日付の手紙では、マタモロスへの途上、先に行ったポッター大尉を追ってラバを急がせていた時に遭遇した出来事をしたためている。喉の渇きで気絶しそうになって草の上で休んでいたところ、「尖った棒を手にして、牡牛の引く荷車に乗った」メキシコ人——実は地域農民の団体——がやってきたので、「無条件降伏」(I'll surrender at discretion [190]) を申し出て末期の水を乞う。メキシコ人が寛大に対応してくれたことに対して「これはルールに則った戦争のようだ」(...this looks like civilized warfare [190]) との感想を抱く。やがて救助に駆けつけたポッター大尉の怒りに驚いたメキシコ人は逃げ散らばるのであるが、「無条件降伏をしたので、あいつらに戦いを挑むのは騎士道に反する」(I've surrendered at discretion and 'twouldn't be chivalrous to fite 'em now [191]) というジョーンズの意見に従って、農民に一瓶のウイスキー——実はポッターが用意していた安酒——との交換を申し出て受け入れられ、ジョーンズは解放される——騎士道物語にかぶれたドン・キホーテを思わせるようなジョーンズの反応は、自分に対するジョーンズ自身そしてヘイルのパーレスクとなっている。

また、1846年9月30日付の手紙は、9月21日から23日にかけて戦われた「モンテレーの戦い」(The Battle of Monterrey) を、『ピカユーン』を経由して

テイラー将軍へ報告する「公式文書」(Official Despatch [201])となっており、上でも言及したように、初日には戦死者は出ず、負傷者はスズメバチに刺された一人だけであった。22日も、激戦を繰り広げる「正規軍」(reglars)や「ルイジアナ志願兵部隊やテキサス人」(Luzzanny volunteers and Texicans)、「そのほか [ローマの軍神] マースの勇敢な息子たち [the other gallunt sons of Mars]」に対して「邪魔にならないように距離を置いてあとを勇敢についていった」(..follered bravely at a respeckful distance)。そして敵が逃げ去って明け渡していった頑丈な家の一軒を「われわれの有益な任務」(our vallerable sarvices)に対して「ポーク氏」(Mr. Poke [Polk 大統領のこと])が「プレゼント」として与えてくれることを期待している [以上、201-03]——傍点を施した箇所もすべて、ジョーンズの部隊に対するジョーンズ自身そしてヘイルのバーレスクである。

さらに、1846年11月11日付のモンテレーからの手紙 [203-05] と1848年3月1日付のハラバ (Jallaper [=Jalapa]) からの手紙 [205-09] でも、ジョーンズの志願兵部隊に対するジョーンズそしてヘイルのバーレスクは続く。これらの手紙は『ピカユーン』を経由してポーク大統領に宛てたものとなっている。ポーク大統領に「私の親愛なる友」(*My dear fiend*) と語りかける最初の手紙では、自分の部隊——モンテレーの町を占拠した「われわれの武勲」(our distinguished conduct) によって、自ら「ライオン部隊」(Lioneers) と名乗っている——の内部で起こった将校同士の喧嘩に対して、両者を謹慎処分にしたところ、一人が手紙でジョーンズの個人攻撃をしてきたことを話題にしている。個人攻撃に対してジョーンズは直ちに「銃殺に処する戦地軍法会議」(a drum-head court marshall to shoot Mr. Tucker) を命じて、ワース将軍 (General William Jenkins Worth) にアドバイスを求めたところ、[あまりにもばかばかしい内容であることから] しばらく笑いをこらえることができなかった将軍から、軍法会議にかけられる代わり、書簡で収めるようにと言われ、「おまえは恥知らずのいまいましい悪漢」(You're an impudent infernal rascal) で始まる手紙を送り返す [以上、203-05]。

ハラパからポーク大統領に宛てた第二信では、メキシコ軍 (the Mexican Gorilleres [=Gorillas]) によって捕虜にされ、一年近く町で軟禁状態になっていることを報告している。1847年2月31日に (on the 31st day of Febbewary, 1847 [2月は28日まで])、リオグランデのマタモロス (Mattymorus) からさほど遠くないところで「へとへとに疲れきって」 (...got very tired and fagged out) 寝入ってしまったところ、“Carajo! Americanos. Es tiempo de levantarse?” (Damn! Americans. Is it time to get up? [Piacentino, 209n]) という「メキシコ人」(greasers [メキシコ人を軽蔑して呼ぶ言葉]) の兵隊——槍などで武装した約2百人の騎馬兵——に取り囲まれていた。メキシコ人の言葉を「本のように話す」サイモンが “Buenas tardes, Caballeros!” (Good afternoon, Gentlemen! [Piacentino, 209n]) と応じたのに対して、メキシコ人の指揮官は「非常に丁寧に」同行を命じ、ジョーンズ一行は「メキシコ人のもてなしを受ける」(to pertake [=partake] of Mexican hospitality) ことに従った、というのである。メキシコ人のポーク大統領を痛罵する言葉——“Senor Poke was ‘mucho marle por los Mexicanos’” (A corruption of “mucho malo por los Mexicanos”: So much the worse for the Mexicans [Piacentino, 209n])——に対してジョーンズは、「ただ黙って聞いていることしかできなかった」(All I could du, you know, was to knock under and keep dark) という——アメリカ大統領の威厳を奪い取るスペイン語の響きを感じ取っているジョーンズにすれば、「ただ黙って聞いていることしかできなかった」という言葉は、ポーク大統領に対するジョーンズの精一杯の皮肉が込められたものであると受け取れる。そして捕虜になった自分の志願兵部隊が「[スペイン語を] 学ぶ」のは、せいぜいメキシコ人女性をナンパするためだけではないのである [以上、205-06]。

ジョーンズは、自分の部隊には「非常に多くの女好みの男たち」(tu menny ladies' men) がいることを明かしており、妻ジェルシーの妹ルースと結婚して義弟でもあるサイモンも「肉食性習慣」(carniverous [=carnivorous] habits [いわゆる肉食系男性]) ゆえに、「彼のしていることの4分の1でも

ルースが聞いたら、悲嘆に暮れるだろう」としながら、サイモンの浮気を暴露している。そして最も派手に女性と交際するのがポッター大尉であるが、いい仲になったメキシコ人女性との愛撫の最中、ポッター大尉のカツラがはずれ、これまでカツラを見たことがなかった女性は驚いて逃げ出し、恋も冷めてしまった、としている [以上、206-07]。

付け加えておけば、カマルゴ近くから送付した1846年8月15日付の手紙においても、義弟のスポールディンが「スペイン語を習っている」(...he has larned Spanish) のだが、「妻帯者だから、ここに来てからというもの、あまりにも自由にやっている——セニョリータたちと」(Simon has ben 'tirely tew free sense he's ben here, for a merrid man, with some of the Don Senoreeters [195]) と、スペイン語を使ってメキシコ人女性をナンパしていることを『ピカユーン』に報告している。そのようなスポールディンに乗せられたポッター大尉も、財産を持った未亡人と思ひ込んで、スペイン語の辞書から書き取った紙を見ながらその女性に求婚するものの、「ケンタッキー・メキシカン」(Kentucky Mexican)——すなわちケンタッキー州出身の「アメリカン・メキシカン」——の夫が現れてポッターの前に立ちはだかる。ポッターの狼狽、というよりも、辞書片手のスペイン語速習ゆえ、妻に使うべき求婚表現——「おれを夫にしたらどうだ？」(“Como megooter por uno marredo?” [Como me gusta par un marido?])——を夫に向かって使ったために、「おれがおまえの夫ってことになるぞ！ (“Estoe su marredo!” [=Estoy su marido!]) ということになる。しかしメキシコ人夫婦の怒りを買うどころか、あきれ返られて相手にされず、そのお陰で窮地を脱することができた、というのである [以上、195-96]⁵⁾。喉の渇きを癒してくれたメキシコ人農民の寛大さに接して「これ

5) ポッターとメキシコ人女性や彼女の夫である「ケンタッキー・メキシカン」とのスペイン語でのやり取りは次のようである [195-96]——Potter: “Como megooster, Seenoreter?” [Como me gusta, Señorita?=How do you like me, Miss?]...Mexican woman: “Carawhoe!” [Cargio=Damn]...Kentucky-Mexican: “Ka, Seenor?” [Que, Señor?=What, Sir?]...Potter: “Como megooter por uno marredo?” [Como me gusta par un marido?]=How would you like me for a husband?]]...

はルールに則った戦争のようだ」との感想を抱くポッターの描写 [190-91] などと併せて、スペイン語でのやり取りは、対等な意識感覚というよりも、メキシコの方が優位な意識感覚をもって対峙していることが読者にも伝わるように描き出されている——それは、アメリカ人に対するメキシコ人の軽蔑と憐憫の入り混じった「温情主義」(paternalism) のようなものでもある。

『ジョーンズの手紙』に散りばめられているスペイン語やフランス語の響きや、完全にメキシコ人としての生活を送っていると思われる「ケンタッキー・メキシカン」の描写は、国境紛争とは関係なく、カナダやテキサス共和国やメキシコとの国境を突き崩している、という意味合いを帯びている。それらは、マニフェスト・デステイニーに刺激されてますます強まる国家意識(nationalism)をも揺るがす力を秘めている、とも読める。さらに言えば、「ポストエスニック」(postethnic)の観点で発言しているポストコロニアル(postcolonial)なメキシコ系アメリカ人の評論家リチャード・ロドリゲス(Richard Rodriguez)の^{ボーダー}国境意識も感じ取れる——^{ボーダー}国境は、「明確な切れ目で、われわれの終わり、彼らの始まり」といった意味合いのものではなく、アメリカ英語の「フロンティア」(frontier)と同じように、「メキシコのスペイン語」(Mexican Spanish)の「フロンテラ」(*la frontera*)が意味する「それほど固定されていないようなもの」である [Rodoriguez, 84-85]。「メキシコ人にとって、^{ボーダー}国境は硬直したピューリタンのもの、一本の線ではない...^{ボーダー}需要と供給によって左右されるようなものである...^{ボーダー}国境は回転扉である(The border is a revolving door) [Rodriguez, 90-91]。

ポーク大統領に宛てた第二信のことに話を戻せば、ハラバ近くの駐屯地である「サンタ・アナの館」(Santy Anner's Hassyender [=Santa Anna's Hacienda) から『ピカユーン』の編集者に宛てた1848年3月10日付の手紙で、ポーク大統領宛の第二信が大統領本人に届いたか、それともメキシコ軍 (the

Kentucky Mexican: “Estoe su marreedo!” [Estoy su marido!=I am your husband!]...Potter: “Bunos deeos [Buenos Días, Seenor Kentucky Mexicano=Good day] (正しいスペイン語と英語訳については [Piacentino, 197n] を参照)。

gorillers) の手に渡ってしまったか、を心配するジョーンズは、「未来の墓の中にある問題」(a matter that “lays in the tomb of futurity”) という言い方で、ポーク大統領には届くはずがないと承知していることを仄めかしている [209]。

以上見てきたジョーンズの部隊のメキシコ参戦を改めて確認してみれば、ジョーンズは大佐としての役を務めながら、常に冷めた目で自分自身や自分の部隊に対しても距離を置き、自分たちの言動を自分で揶揄するバーレスクの視座でとらえていたことになる。マサチューセッツの志願兵合同部隊がプラケマインに到着した際、「パーティ——フランス人なら “tater-tate” [=tête-à-tête <私的な会合>] と呼ぶようなものを開いた」のであるが、ヴィレッジ軍の指揮官に、『プラケマイン・ガゼット』『プランターズ・ガゼット』のこと』の編集者、郡検屍官、雑貨店店主を呼んでほしいと依頼したところ、編集者は紙上で自分をからかう無礼を働いたゆえ (...that gentleman had taken the liberty tu make fun on him in the newspaper)、声を掛けるのを断った、としている [178-79]——これらの職業はすべてヘイル自身が従事していたものであり、「自分が自分をからかった」ゆえに「自分で自分に声を掛けるのを断った」という、バーレスクの枠組みをユーモラスに提示しているのであり、メキシコ戦争の描写も含めて『ジョーンズの手紙』全体のバーレスクの枠組みを暗示していることにもなる。

しかし同時にジョーンズはそのようなバーレスクの枠組みの中に本音をも差し挟む——1846年8月15日付の手紙——上で取り上げたスポールディンとポッターによるメキシコ人女性ナシパの様子ナシパの報告——の冒頭で、「先日、軍隊を辞めたい思いが強くなった。実のところ、時おり栄光にはへとへとに疲れる」(I had a great notion t’other day of resinin from the army. The fact is, every now and then I get fagged out with glory [194]) との感想を漏らしている。今の自分を支えて「モクテズマの館」(the halls of Montyzumy [=the Halls of Montezumas]) を目指させるものは、テイラー將軍から頼まれはし

ていないが、将軍のような「立派な人間」(that good man) も「少ない」(scarce) からということと、だれよりも真剣に任務遂行に関わっているポッター大尉を見過ごしてルイジアナに戻ってしまうことは「永遠に恥ずべきこと」(an everlasting disgrace) であるから、としている [194]。

また、上で言及したポーク大統領宛の第二信の後半で、軟禁状態の中でメキシコ人から、合衆国のある大政党 (a large party [おそらく民主党のこと]) が語っていることとして、「メキシコに有利なように戦っている... アメリカ側が不当になるかたちで宣戦布告した... メキシコと戦っている兵士には人殺しや泥棒が多くいる [a lot of cut-throat and robbers]... 大統領がリオグランデ北方に兵士を招集しなければ、これ以上お金を注ぎ込まないだろう」といったことを告げられ、それに対してジョーンズは、「[メキシコ人の言うことは] 真っ赤な嘘で [a cussed lie]、やつらが名前を挙げた合衆国の偉人たちは、そんなことは公には [publicly <イタリックは原文のまま>] 言わないだろう——戦争の最中には」と反論する。それに対してメキシコ人が証拠として北部の数紙の新聞を差し出したところ、ジョーンズの部隊は「親父に短剣で刺されたように感じた」(We felt just as if we'd ben struck by our daddys, with dinks) のであり、ポッター大尉は自分の剣を膝で折って自分の軍服を引き裂き、サイモンは「やけくそになって、ファンダンゴ (fandango [スペインの陽気な舞踏]) を死ぬほど踊りまくり、シンカー中尉 (Leftenant Sinker) は皮膚の皮が剥がれるまで拳を壁にぶち当て、帰宅して「アグアルディエンテ」(arroydenty [=aguardeiente <精製の粗いブランデー>]) を五杯あおった」というのである。そしてジョーンズは、合衆国の「大物ボス」(our big-bugs) の発言は「政治的に意図されただけ」(...was only meant *politically* [イタリックは原文のまま]) のものであると再び反論する。しかしメキシコ人の議論は延々と続き、最後に彼らが言うには、アメリカの「偉大な人間」(grate men) は「大嘘つき」(grate liars) か、または「何人かはメキシコ人の友人」(friends to the Mexicans) というのである。このようなジョーンズとメキシコ人のやり取りをしたことを述べたあとに続けて、「我が最愛の司令官」(my dearly

beloved chief magistrate) なるポーク大統領に対して、「ライオン部隊が遂行した大奉仕と苦難」(the great services and hardships that the *Lioneers* has executed [イタリックは原文のまま]) に対して、また大統領に対して感じている「非常に深い愛」(the very great love) に対して、サンタ・アナの館と土地をジョーンズたちに譲ってほしいと要求し、この「ささやかなお願い」(this little favor) を聞いてくれなければ、大統領に対する考えは深刻な変化を被ることになり、大統領の評判を破壊するためにあらゆる手を尽くすことを考えるが、ただ「自分はだれとも喧嘩したくはない」(I don't want to quarrel with *enny* man [イタリックは原文のまま]) と、大統領に対する脅迫めいた言葉で手紙を締めくくっている (以上、208)——アメリカに否定的な合衆国の為政者たちの発言は「公のもの」ではなく、「政治的に意図されただけ」としても、ジョーンズがイタリック体を用いて表記しているのは、権力の駆け引きを演じる政治の「レトリック」を見透かしていることを強調していると読み取ることができる。すなわちアメリカの政治に対するジョーンズ自身そしてヘイルのバーレスクとなっているのである。

駐屯先の「サンタ・アナの館」から『ピカユーン』の編集者に宛てた1848年3月10日付の手紙で、上でも言及したような、大統領が受け取ることはないと予想する文面に続いて、アメリカから送られてきた、日付も刊行場所も異なる非常に多くの新聞に目を通して、「何事につけても意見が非常に異なるので、頭が完全に混乱し、何が何だかまったくつかめなかった」(...disagreed so much about every thing, that it put my head all into a snarl to read them. I couldn't make head nor tail out of nothing in them [209]) としている。そして「次期大統領がだれになるのか？ テイラー將軍か、クレイ氏か、ポーク氏か、キャス將軍 [Lewis Cass] か、ウッドバリー氏 [Levi Woodbury] か、それとも他にだれがいる？」と問いかけ、ライオン部隊は「どのように猫がジャンプするのか」(...how the cat is going to jump) かなりはっきりするまで態度を決めたくない、としたためている [210]——つまり、戦争についてさまざまな意見に分かれ、アメリカの指導者を予想することができない状況から

して、ジョーンズをはじめとする志願兵部隊にとって、メキシコ戦争を戦う正当な根拠がますます曖昧になっていることを裏書きしていることになる。それは、アメリカの領土拡張が神の啓示であると信じるマニフェスト・デスティニーの意味も不鮮明となっているということに他ならない。

1846年8月20日付の手紙では、20人の鼓笛隊——19人がクラリネットを、ポッターがオーボエ (ho-boy [199])——を編成して、正規軍や志願兵部隊の将校に演奏の招待状を送ったが、だれも現れなかったことも報告している。ポーク大統領宛の第二信でも、鼓笛隊が「ヤンキー・ドゥードゥル」(“Yankee Doodle”)を演奏して通りに繰り出したものの、五百頭もの駄馬を驚かせ、女性 (senoritas) が金切り声を上げて大混乱を引き起こし、五人は腕や足を折り、全員、多かれ少なかれ打撲傷や擦り傷を負い、ロバにまたがって逃げ込んだサイモンの服はカシの木の藪の中でずたずたに裂け、楽器も木っ端微塵に壊れてしまった、というのである [以上、207-08]。ロバート・ジョウハンセンの分析によれば、メキシコで戦うアメリカ兵士の間で「ヤンキー・ドゥードゥル」ほどポピュラーな歌はなかった理由として、メキシコ戦争は「ヤンキー・ドゥードゥル」と結びつく独立革命と関連づけられたこと、あるいは、未経験で訓練されていない若い志願兵の精神と合致したということが考えられるとし、「ヤンキー・ドゥードゥル」は「アメリカ人の戦いの調べ」(the Americans' fightin' tune)であると、ある一人の志願兵の言葉を引用している。またマタモロス占拠に同行した一人の「従軍記者」がニューヨークの『時代精神』に送付した記事によれば、「太鼓や笛がいつも、アメリカ人の胸いっぱいにも最も純粋な愛国心を満たしてくれる」というのである (Johannsen, 54)——ジョーンズの鼓笛隊のパーレスクは、マニフェスト・デスティニーがかき立てる自由・平等の精神や愛国心で胸いっばいに満たしているはずのアメリカ志願兵の戸惑いや不安を見透かしているのである。

志願兵の動機づけに大きな役割を果たしたのが「愛国心、忠誠心、名誉や榮譽」(Johannsen, 65)であるとするならば、ジョーンズの部隊でこの精神を最大限に発揮しているのがポッター大尉である。20人の将校のみの部隊となっ

てポーク砦に到着したポッター大尉が、部隊を出迎える砦の大佐に向かって、「自分たちの責任において、いろいろな戦いの任務をすること以外にしたいことはない」 (...we didn't want nothin' 'cept tu du a little missylyaneous [= miscellaneous] job of fightin', on our own hook [188<下線は廣瀬による>]) と、目的を告げるのに対して、大佐は「できるだけ丁寧に微笑みかけて」 (smilin' as perlite as could be [188])、部隊の構成要件 (20人以上) を満たしていないと応じる——すなわち、微笑みの裏で、ジョーンズを単細胞な人間として見下げ、部隊の受け入れにはきわめて消極的な思いでいることを、ジョーンズは見破っている。しかし大佐の丁寧さを真に受けているポッターは、真剣な態度を崩さないどころかますます力を込めて、「われわれは一騎当千の士であり [...we're a **host** in ourselves <イタリックは原文のまま>]、他人の規則や規制それに軍法に従うためにやってきたのではない... われわれの自由にして賢明な国の戦いのためにやってきた」 [188] と返答する——ポッターは単細胞人間ではあるものの、同時にそれだけいっそう純粹で正直で誠実な人間であるという印象がジョーンズの心を引きつけて、ポッターに深い愛情を抱いているのであり、「愛国心、忠誠心、名誉や榮譽」 (Johannsen, 65) を体現する志願兵としても敬意を表している。ポッター大尉の自己規定——「ネイサン・ポッター大尉、前の戦争 [1812年戦争のこと] を戦い、昔の革命 [独立革命のこと] にも少し接触し、この前の戦争でロードアイランド征服の助太刀をした (...helped coker [=conquer] Rode Island)。しかしルイジアナへ移住し、そしてメキシコ人と戦うためにやってきた」 [196]——は、サンタ・アナの館でも繰り返される [206]。しかし、このような自己規定が真剣であればあるほど、ポッター大尉の存在の希薄さが透けて見えることになっているのであり、志願兵の理想像が崩れていることの証左ともなる。しかしそうであるからこそ、ポッター大尉に対してジョーンズは、愛情に加えて、深い同情・憐憫の情をも禁じえないのである。

ポッター大尉の “on our own hook” という表現は、「自分たち自身の判断・意思・責任のもとで」という意味であり、「アメリカ人は自分を理解するよう

に志願兵を理解していた」としてジョウハンセンが挙げる「志願兵」の性格、すなわち「質朴、気取らない、権威・権力には我慢ならない、個人主義的、社会の階級を軽蔑する」[Johannsen, 30]といったものを、端的に言い表すものになっている。しかし、ポッター大尉を見下げるように対応する大佐の反応を見破っているジョーンズは、志願兵のよって立つ場が不確かになっていることに薄々気づいている。ロードアイランド遠征においても、当地住民から「**合法側**か、それとも**違法側**」のどちら側と戦うつもりかと詰め寄られたサイモン隊長が、「われわれはわれわれ自身の判断にしたがって戦うということだ」(We meant to fight on our own hook [112 <下線は廣瀬による>])と、この表現を用いていた。しかしそれに対して住民に大笑いされ、続く場面も案の定スラップスティック・コメディ下タバタ喜劇で終わっていた。そしてまた、国会議員の立候補者ジョーンズ自身も、二人の対立候補者に反対するのは止めて、彼らの主義主張の間に行く、というやり方を、「自分のやり方にしたがってやる」(I'm goin' tu run on my own hook [153 <下線は廣瀬による>])という表現で説明していた。ポッター大尉、サイモン、そしてジョーンズがそれぞれ用いる“on our own hook”という表現は、いずれもバーレスクのトーンが支配する文脈の中にあるのであって、それは、ポッター大尉やサイモンそしてジョーンズを超えて、マニフェスト・デスティニーを支える国民としての誇りや自負が空回りしていることを暗に示す表現ともなっている——彼ら在必死で“on our own hook”にこだわっているからこそ、なおさら空回りするのである。

しかしまた、そうであるからこそ、1848年4月27日付の『デイリー・ピカユーン』に掲載されたポッター大尉の次のような演説は迫真性を帯びてくる——だいいち、これまでの規範を逸脱した文法・語法・綴り字表現が極端に少なくなっている。その点、もしかすればポッター自身が自分のよって立つ場の不確かさをかなり意識しての発言とも取れるのであり、そうとするならば、アメリカ発展を神の啓示と確信して謳歌する純粋な精神の発揚の源となったアメリカのマニフェスト・デスティニーが、政治権力の駆け引きのために用いられる言葉のレトリック以外の何ものでもなく、自由や平等や愛国心の表象とされ

る志願兵の存在価値が薄れ、国家主導の権力支配体制へと変貌していくアメリカの姿をとらえる、ポッターそしてヘイルのバーレスクが作用していると言える——ヘイルとの距離がジョーンズよりも少し離れたところにいたポッターが、ここではヘイルの側に立って、ヘイルの代弁役を買って出ているともとれる：

Yes, how will this war affect the politics of our country at home? I am credibly informed by a letter from the Bay State... that the army in Mexico and their gallant deeds are used as articles of trade by the political gamblers a hum! Yes, we who have ben here two years, fighting, bleeding, starving, toiling, suffering sickness, and seeing our loved comrades die around us, 'cause we thought we was sarving our country—we are to be used to elevate or prostrate a few cussed rascals that call themselves whig and dimmercratic leaders at hum!... Those heartless demagoques, who act as if the Government was made for them to pray upon—as if the people were a pack of cards for them to gamble and swindle each other with—as if the blood of our officers and sogers was ditch-water, to propel their cunning machinery—as if our honor and fame were to depend on their interests—they are now using our names with as much freedom and with as little delicacy as if we were Mecican mules ; and their sycophantic agents, their stump-speakers, their feed writers, and even their little snotty-nosed editors, that are found scattered over the country in obscure villages—they talk about the deeds of our officers and sogers, criticize the plans of our gin'ral and the manoeuvres of the troops, blame or praise the acts of individuals with an air of as much confidence as if they really knew something about war, and as if they had ben here and fit like heroes themselves! This is hard, feller-sogers, to bear. [217]

メキシコ戦争が「我が国の政治に対してどのような影響を与えるのであろう

か」と問いかけるものの、以下に続く言葉は、「メキシコでの軍隊、軍隊の勇敢な行為が、故国では、商品として政治的賭博師によって利用されている…故国で、ホイッグ党あるいは民主党の指導者と名乗る少数の悪漢を持ち上げたり下げたりするために、われわれは利用されているのだ… 何ともひどい煽動家——彼らが巧みに付け入って利用してだますために (to pray upon [=to play upon]) 政府はつくられているかのように行動する——国民をトランプカード一組と見なし、互いに賭博をして騙し取り合いをするかのように——我が将校や兵士たちは、彼らの狡猾な機構を前方へ推進させるプロペラを回す溝のたまり水であるかのように——われわれの名誉や栄誉は彼らの利害に依存している——今では、彼らはわれわれの名前を、われわれがメキシコの口バであるかのように、思いのままに、思いやりの心もなく使っている…」——マニフェスト・デスティニーの精神を謳歌し、自由・平等精神や愛国心に燃えて前進しているかのように思えた、アメリカの民主主義を体現する存在であった志願兵の目を通して、マニフェスト・デスティニーの裏側に張りついた政治権力志向・欲望のからくりを見透かしているのである。

そしてこれに続く言葉は、「[政治的権力者に] ゴマをする代理人たち、街頭演説を得意とする雄弁家、そして政治家や雄弁家の引き立て役のもの書きや傲慢な編集者たち」が全土に散らばって「あたかも戦争について知っているかのように、ここで自分たちが英雄のように戦っているかのように、自信たっぷりといった勿体ぶった態度で」戦況を伝えている——そしてこのような姿は、兵士にとっては「耐え難いこと」というのである。しかし、ポッター大尉はここで思い直して、同胞の士気を高める言葉を思い出すのであるが、やがてバラクルスから到着した郵便担当兵が運んできた新聞を求めて、兵士たちはポッター大尉を一人演壇に残して立ち去っていくのである [218]。

政治的権力者やそれを取り巻く雄弁家たちに加えて、戦況を伝えるべくメキシコに足を踏み入れた「ヘイル」も含めた編集者をも突き放していることにもなる。アメリカ史上最初の「特派員・従軍記者」としてのヘイルに対する「旧南西部ユーモリスト」としてのポッター大尉そしてヘイル自身によるバーレス

クが見られるのである——今なおマニフェスト・デスティニーの意味を模索することを促すバーレスクとなっているのである。

結 語

1783年のパリ条約によって、北は五大湖とセントローレンス川 (the St. Lawrence)、南はスペイン領土との境界まで、西はミシシッピ川までを国土としたアメリカは、1803年、当時の大統領とトマス・ジェファソンによるフランス領ルイジアナの総面積82万8千マイルの土地購入によって、国土を倍加する。さらに1836年のテキサス共和国のメキシコからの独立を経て、1845年にその土地を併合し、1846年に始まったメキシコ戦争とそれを終結した1848年の「グアダルーペ・イダルゴ条約」(Treaty of Guadalupe Hidalgo)によって、太平洋岸に至るメキシコ領土を獲得する。また1846年には、イギリスとの国境協定によって、オレゴン地方を国土としている。付け加えるならば、アメリカの黒人解放奴隷をアフリカの土地に帰還させる目的で「アメリカ植民協会」(The Society for the Colonization of Free People of Color of America)によって1816年につくられ、1822年に最初の移民団が足を踏み下ろした入植地「モンロビア」(Monrovia [1847年にアメリカから独立して「リベリア共和国」<the Republic of Liberia>となった])も、当時のアメリカ人の意識では、はるかに海を越えての領土拡張の結果ととらえる向きもあったのではないだろうか(1842年11月7日付の手紙の中で、ジョーンズが選挙公約の一つとして、「もし私が選ばれたなら、大統領と画策してジョン・クインシー・アダムズをアフリカへ海外伝道に追いやってしまう」[136]としているが、モンロビアが念頭にあったと考えられなくもない)——以上のような領土の獲得・拡張は、アメリカの繁栄は建国当初から神によって約束された「明白な運命」^{マニフェスト・デスティニー}であるという信念を生む。土地投機熱に沸き立つ、いわゆるランド・ラッシュ、フロンティア奥地への綿花栽培そして奴隷制の拡大、大動脈ミシシッピ川の蒸気船時代の到来、カリフォルニアの金発見によるゴールド・ラッシュ、また西部に人や物

資を運ぶ鉄道の敷設などによって、移住の波は怒涛となって押し寄せたのである。フレデリック・ターナー (Frederick Turner) によれば、「自由な土地が個人主義、経済的平等、立身出世する自由、すなわち民主主義を促進させたのである... 自由な土地は自由な機会を意味するものであった。このような土地が存在していたということが、アメリカ民主主義を、それ以前のいかなる民主主義とも異なったものにしたのである」 [Turner, 259-60]。

このような状況の中で、『ジョーンズの手紙』のジョーンズは、「[1775年の独立戦争の最初の交戦地] バンカーヒルの地 [the land of Bunker Hill]——[1775年のアメリカ民兵軍とイギリス正規軍との衝突の地] レキシントンの地 [the land of Lexington]——[1620年にメイフラワー号 <The Mayflower> の到着した地点プリマス <Plymouth> の石である] ピルグリム・ロック [Pilgrim Rock] の地 [一般には “Plymouth Rock” と呼ばれる] の出身であり... この栄えある合衆国 [this glorious Union] を守るために戦った英雄の祖父たちの子孫」 [173-74] として、南部へやってくる。南部社会の表象であり「文化英雄」 (culture hero) ともなる「詐欺師、コンフィデンス・マン [confidence man]」の洗礼をも受けながら、「この広くて冷たく、寒々として荒れ果て、汚らわしくて卑劣であり、極悪非道にして厳しく忌まわしいこの世界」 [53] で、ポッター大尉と同様に「自分の考えもすっかり **土地に染まった**」 (...my principles has become **acclimated** [215])。それは、マーク・トウェインと C・D・ウォーナー (Charles Dudley Warner) の『金ぴか時代』 (The Gilded Age, 1873) の技師がミシシッピ川西岸のセント・ルイスにおいて、「西部の熱病に慣れた」 (“acclimated” to western fever [Twain, 153]) のと同様に、「南部の熱病に慣れた」ということであつた——それが、「あまり起こりえない珍しい類の悪性の熱病で死なないようにするためのワクチンのようなもの」か、入会後も会費をとられるような組織に「通過儀礼 [initiation] するようなもの」か、「風土慣れの水差し」 (acclimation jug) から「毎朝食前にウイスキーアサフェティダと阿ビターズ魏を混ぜた苦味酒を一口飲む習慣を身につけるだけのことか」 [Twain, 153-54] のどれかに当てはまるかどうかは別にして、南部の土地への

“acclimation”を深く体得していた。

ただヘイルはメキシコで罹った「黄熱病」(yellow fever)が原因で死去した——象徴的な言い方をすれば、ヘイルはアメリカ南部の風土には染まった(acclimated)が、メキシコはやはり異国の地であり、それを自分たちアメリカ人のものにして慣れる(acclimated)には、乗り越えられない歴史や文化の壁があった、ということではなかったか。それは、国境をいとも簡単に素通りしてメキシコ人女性と結婚し、土地に完全に“acclimated”したと思える、あの「ケンタッキー・メキシカン」のようにはいかなかった、ということであろうか——少なくとも「従軍記者や志願兵としてのヘイル」にとってはそうであったと言える。「ユーモリストとしてのヘイル」は「従軍記者や志願兵としてのヘイル」から少し距離をおいて、そのことを見通していたということになる。

ヘイルは、出身地はマサチューセッツに隣接するロードアイランドながら、ジョーンズとまったく同じ人生を送った。マニフェスト・デスティニーの時代機運に乗り、メキシコ戦争の特派員・従軍記者として、また志願兵として、メキシコ戦争に加わった。自由・平等精神と愛国心を抱きながら、留まることを知らず拡張していくアメリカの大地における、新しいアメリカのアイデンティティを求めている。しかし、その自由・平等精神や愛国心の根幹をなすアメリカ民主主義の理念が、たえずさまざまな意味づけを迫られる、なお曖昧なものであることに気づかされていたヘイルは、マニフェスト・デスティニーの意味をも求めて模索していたのであり、それをジャーナリストとは違った視点、すなわち「ユーモリスト」の視点で探し求めたのである。そしてそのユーモアは、彼が生まれ育ったアメリカ北東部ユーモアダウン・イースト・ユーモアではなく、彼が染まった土地の旧南西部ユーモアであった。それは、混沌とした中での自分探しを促すものであって、例えばメキシコ戦争をとらえたもう一人のアメリカ北東部ユーモリスト、ジェイムズ・ラッセル・ローウェル (James Russell Lowell) とは異なる。

ローウェルの『ビグロー・ペーパーズ』(*The Biglow Papers*)においては、

作者の庇護の下で作者の代弁者として重要な任務を与えられているヤンキー、ホウジーア・ビグロー (Hosea Biglow) と、もう一人、ビグロー以上に作者から距離を置かれたヤンキー、バードフレダム・ソーイン (Birdofredum Sawin) を通して、あくまでも「道徳的悪」としてのメキシコ戦争と、領土拡張による奴隷制の拡大という目的を、徹底的に風刺攻撃するローウェルの考えを展開している。ソーインは、メキシコ戦争のための志願兵を募るべく、ボストンの通りを闊歩する軍曹 (a cruetin Sarjunt [=a recruiting sergeant [62]) に甘言でつられ、メキシコ人は「人間ではない」 (n't human beans [79]) と教えられ、それを信じてメキシコまでやってきたものの、メキシコ人として自分たちとかわらない人間であると気づく。そしてソーイン自身、目、手足のそれぞれを片方ずつと、残った手の親指以外の指を失ってしまう。自分たちが獲得しようとする国は「ラム酒と水の流れる正真正銘の約束の地、カナンのようである」 (...a sort o' Canaan, a regl'ar Promised Land flowin' with rum an' water [157]) といいたこれまでの考えも、跡形もなく「溶解してしまい」 (But sech ideas soon melted down an' did n't leave a grease-spot [158])、荒廃した現実をまざまざと突きつけられる。戦争において自分の存在感をつかむことができなかつたソーインは、残された道は政治的地位を得ることであると考えてみるものの、信念が定まらない彼の態度は、ますます存在感をあやふやなものにしていく。やがて黒人奴隷所有論者になるが、最後には捕まえた逃亡奴隷の一家によって逆に扱き使われる羽目に陥り [188-89]、やがてその家族の悪い手本になるからという理由で追い出されてしまう [189]。自己の存在感を必死に求めながらも、ただ空回りするだけで、閉塞状態の中に追い込まれたソーインに対して、ローウェルは憐憫の情を投げかけることを停止しているゆえに、ソーインのあらゆる規範を逸脱した言葉にある滑稽さはグロテスクな響きを帯びている。例えば、片方の目を失った時の描写は次のようなものである：

I've lost one eye, but that's a loss it's easy to supply

Out o' the glory thet I've gut, fer that is all my eye ;
 An' one is big enough, I guess, by diligently usin' it ;
 To see all I shall ever git by way o' pay fer losin' it,
 Off'cers, I notice, who git paid fer all our thumps an' kickins,
 Du wal by keepin' single eyes arter the fattest pickins ;
 So, ez the eye's put fairly out, I'll larn to go without it,
 An' not allow *myself* to be no gret put out about it. [155]

ローウェルの言葉を借りれば、ソーインはつまるところ、「なお教義の中に強い持ち味を残そうと努めているピューリタニズムから完全に後ずさりしている」として、私が察知していた、半意識的な道徳 *欠如* (*Unmorality*) を体現するために登場させられた、ローウェルの「小さな人形芝居の道化」(*the clown of my little puppet-show* [201]) である。『ビッグロー・ペーパーズ』においては、シリアスでメランコリックなトーンを含むビッグローのユーモアと、ソーインのきわめてグロテスクなユーモアとが交錯して、「真のユーモアは決して道徳的確信から遊離しない」(...*true humor is never divorced from moral conviction* [201]) という、ローウェル自身の哲学を証明していることになる(以上のジェイムズ・ラッセル・ローウェルの分析は、拙稿「アメリカン・ユーモアの展開——特にその担手としてのヤンキーの登場を巡って——」を踏まえている)。

それに対して『ジョーンズの手紙』は、ジョーンズやポッター大尉やサイモンとヘイルが対等に関わり、バーレスクの掛け合いを通して協力・協働・共謀しながら、マニフェスト・デスティニーの実体がかみきれない状況の中で、その論理の根幹をなす民主主義の意味を探し求め、そして自分たちアメリカ人のよって立つ場を暗中模索する姿を描いたのである。

主要文献

Haile, Christopher Mason. *C. M. Haile's "Pardon Jones" Letters: Old Southwest Humor from Antebellum Louisiana*. Ed. Ed Piacentino. Baton Rouge: Louisiana State University, 2009. 本書からの引用は本文中にその頁数を示す。ヘイルの略歴、『ジョーンズの手紙』の背景、歴史的事項・人物などについては、ピアセンティノの「序文」や「注」を参照した。参考文献に挙げているピアセンティノの二つの論文はすべてこの本に転載されている。

参考文献

Baldwin, Joseph Glover. *The Flush Times of Alabama and Mississippi: A Series of Sketches*. New York: D. Appleton and Company, 1853; rpt. ed., with an introduction and notes by James H. Justus. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1987.

Brackenridge, Hugh Henry. *Incidents of the Insurrection in the Western Parts of Pennsylvania* (1795). Ed. Daniel Marder. New Haven, Conn.: College & University Press, 1972.

Field, Matthew C. *Matt Field on Santa Fe Trail*. Collected by Clyde and Mae Reed Porter. Ed. John E. Sunder. Norman: University of Oklahoma Press, 1995.

_____. *Prairie and Mountain Sketches*. Ed. Kate L. Gregg and John F. McDermott. Norman: University of Oklahoma Press, 1957.

Haliburton, Thomas C. *The Clockmaker; or, The Sayings and Doings of Samuel Slick, of Slickville: First Series*. Philadelphia: Carey, Lea, and Blanchard, 1837.

_____. *The Clockmaker; or, The Sayings and Doings of Samuel Slick, of Slickville: Second Series*. Philadelphia: Carey, Lea, and Blanchard, 1838; rpt. Upper Saddle River, N.J.: Literature House, 1969.

廣瀬典生. 『アメリカ旧南西部ユーモア文学の世界——新しい居場所を求めて——』. 東京: 英宝社, 2002.

_____. 「アメリカン・ユーモアの展開——特にその担手としてのヤンキーの登場を巡って」. 『外国語外国文化研究』, VI (関西学院大学法学部・外国語研究室, 1984): 187-205.

_____. 「Hugh Henry Brackenridge における民主主義の両義的矛盾をめぐって」. 『関西アメリカ文学』, 26 (日本アメリカ文学会関西支部, 1989): 18-35.

Irving, Washington. "The Legend of Sleepy Hollow." In *The Sketch Book of Geoffrey Crayon, Gent.* (1819-20). In *Washington Irving*. Ed. James A. Tullleton. New York: The Library of America, 1983. 1058-1088.

Johannsen, Robert W. *To the Halls of the Montezumas: The Mexican War in the American Imagination*. New York: Oxford University Press, 1985.

Lowell, James Russell. *The Biglow Papers: First (1846-48) and Second (1862-66)*

- Series*. Boston : Houghton Mifflin and Company, 1891.
- Lynn, Kenneth S. *Mark Twain and Southwestern Humor*. Boston : Little Brown, 1959 ; rpt. Westport, Conn. : Greenwood Press, Publishers, 1977.
- O'Sullivan, John L. "Annexation." *Democratic Review* 17 (1845) : 5 ; quoted in Albert K. Weinberg. *Manifest Destiny : A Study of National Expansionism in American History*. Baltimore : The Johns Hopkins Press, 1935. 112.
- Paine, Thomas. "The Crisis" No. 1 (Dec. 23, 1776). In *Common Sense, The Rights of Man and Other Essential Writings by Thomas Paine*. New York : Classic House Books, 2009. 290-97.
- Piacentino, Ed. "Recovering C. M. Haile, Antebellum Southern Humorist." *Studies in American Humor, New Series* 3, No. 16 (2007) : 47-68.
- _____. "Fetching the Old Southwest in Mexico : The Humorous Letters of C. M. Haile." *Mississippi Quarterly*, Vol. 59, No. 2 (Spring, 2006) : 163-76.
- Reilly, Thomas W. "American Reporters and the Mexican War, 1846-1848." Diss. University of Minnesota, 1975.
- Rodriguez, Richard. *Days of Obligation : An Argument with My Mexican Father*. New York : Viking Penguin, 1992.
- 齊藤眞. 『アメリカ史の文脈』. 東京 : 岩波書店, 1981.
- 佐々木孝弘. 「離婚訴訟に見る婚姻の意味とその変化 (1814年-1933年)——ノースカロライナ州の場合——」. 金井光太郎編. 『アメリカの愛国心とアイデンティティ——自由の国の記憶・ジェンダー・人種』. 東京 : 彩流社, 2009. 87-110.
- Slaughter, Thomas P. *The Whiskey Rebellion : Frontier Epilogue to the American Revolution*. New York : Oxford University Press, 1986.
- Smith, Seba. *The Life and Writings of Major Jack Downing, of Downingville, Away Down East in the State of Maine*. Boston : Lilly, Wait, Colman, & Holden, 1833 ; rpt. New York : AMS Press, 1973.
- Sprague, John Francis. *The North Eastern Boundary Controversy and the Aroostook War*. Dover, Maine : The Observer Press, 1910 ; rpt. LaVergne, TN : Kessinger Publishing, 2009.
- "The Declaration of Independence, 1776." In *A Documentary History of the United States*. Ed. Richard D. Heffner. New York : New American Library, 1976. 15-19.
- Thompson, William Tappan (Jones, Joseph). "Reply to 'Pardon Jones,' of Then N. O. 'Pic.' By Major Joseph Jones, of Georgia." In "Major Jones Defends Himself : An Uncollected Letter." Ed. David C. Estes. *Mississippi Quarterly*, 33 (Winter, 1979-80) : 81-84.
- Thorpe, Thomas Bangs. "A Visit to 'Curnel Pardon Jones.'" In *A New Collection of Thomas Bangs Thorpe's Sketches of the Old Southwest*. Ed. David C. Estes. Baton Rouge : Louisiana State University Press, 1989. 199-202.

- _____. "Letters from the Far West." In *A New Collection of Thomas Bangs Thorpe's Sketches of the Old Southwest*. Ed. David C. Estes. 223-52.
- Turner, Frederick Jackson. "Contribution of the West to American Democracy." In *The Frontier in American History*. With a Foreword by W. R. Jacobs. Tuscon: The University of Arizona Press, 1986. 243-68. 引用の翻訳は次の翻訳書を借用させていただいた。西崎京子訳, [アメリカ民主主義に対する西部の貢献], 渡辺真治・西崎京子訳, 渡辺真治解説, 『フレデリック・J・ターナー』, 齊藤真・大橋健三郎他編, 『アメリカ古典文庫』9, 東京: 研究社, 1995. 63-93.
- Twain, Mark. *The Adventures of Tom Sawyer* (1876). Rpt. in *Mark Twain: Missisppi Writings*. Ed. Guy Cardwell. New York: The Library of America, 1982. 1-215.
- _____ and Charles Dudley Warner. *The Gilded Age* (1873). Rpt. New York: Oxford University Press, 1996.

